
くろやみ国の番外編

やまく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

くろやみ国の番外編

【NZマーク】

N6237P

【作者名】

やまく
へまく

【あらすじ】

「くろやみ国の女王」の番外編です。
小説や登場人物紹介などがあります。

登場人物紹介（本編開始時）（前書き）

本編開始時の、ネタバレにならない登場人物紹介です。

登場人物紹介（本編開始時）

人間

ファム

花屋でバイトしている女の子。

親は既に死に、残されたささやかな一軒家で暮らす。
家の裏庭には彼女が大事に育てている花壇がある。

精霊にかなり慣れた対応をする。突然話しかけられても驚かず「な
にしてんの？」と呆れるくらい慣れている。

黒い瞳に背中までの黒い髪。どちらも珍しいが本人は気に入っている。

ヴィル

ファムの恋人。約束の時間に彼女の家に迎えに来た。
丁寧な口調で喋る男性で、どうも身分が高いらしい。

精霊

銀色の精霊

ぼろぼろの外套を着た、変な闇の精霊。
銀の髪に銀の仮面のような顔を持つ。

街角で、いきなりファムに話しかけてきた。
とぼけた性格をしている（精霊には良く有る事）

登場人物紹介（本編開始時）（後書き）

読む前の紹介ってどう役に立つのだろうかと思いつつ書いてみました。

登場人物と国の紹介（第一章終了時まで）（前書き）

いわゆる登場人物紹介です。人じやないのもいますが。

思いつきりネタバレがありますので、本編を楽しみたい方は第一章
読み後に読む事をオススメします。

物語のネタバレにならないけど本編に出てない設定なども書いてあ
ります。

登場人物と国の紹介（第一章終了時まで）

第一章終了時

＜登場人物＞

* 人間

ファム：

平民育ちの女の子。平日は花屋でバイト、週末は自分で花を売つて生活していた。

幼い頃に両親を亡くし、唯一残ったこぢんまりとした一軒家をとても大切にしている。両親は精霊に関わる仕事をしていたらしい。

初登場時 19歳

身長は 165 cmくらい。

豊かな艶のある黒髪とくびれたウエストが自慢。瞳も黒。胸は Dカップくらいはある。ふかふかである。

属性は闇。人間の属性が関わるのは術の適正程度。血液型みたいなもので、闇といつても珍しいだけで特に忌まれることはない。精霊曰く、彼女は己の身体の命脈だけでなく、気脈までも自由に扱える人間。身体は天地万物の氣脈に柔軟にできているらしい。

銀色の精霊と出会い、いろいろあって国を出てくろやみ国の女王になる。けつこう壮大なものを背負わされているが、本人はあんまりわかっていない。

苦労しながら家を守つて来ただけあって、性格は明るく前向きで強気。物事を深く考えないタイプで、怒るときはものすごく怒るが、気が済むとけろりとしている。

(「キレやすいのは、精靈に対してだけよ!」)

精靈にかなり慣れた対応をするが、学術的に勉強した訳ではない。

ヴィル（ヴィルヘルムス）：
はっぺいく
白箔国^{はくはくこく}の青年。

ファムと出会い、ファムが國を出る直前まで恋人同士の関係にあつた。

現在は・・・?

初登場時17歳。

いつも冷静で、あまり動搖したりしない性格。

ファムを探している。

レーへンと戦闘になること、2回。

なんでも淡々とこなせる男。一応光属性だが法術は大体なんでも使える。精靈術も使える。

戦闘時は両手にグローブをはめて、仕込んだ様々な術式で戦略的に闘う。

ファムが行方不明になつてゐるうちに即位して国王になつた。さらには年齢も身分も、正式な名前も告げてなかつた。

本編中一番頑張つて欲しい人物。

ルトガー：

ヴィルヘルムス配下の諜報部隊員。

ヴィルヘルムスが王になる前から知り合い。

軽い性格。口調も軽いが、仕事はきっちりこなせる男。
着崩した軍部の制服を着ている。

ナールデン公爵：

軍部を勝手に動かせるくらいお偉い貴族。

ヴィルヘルムスとファムの仲を知つて、ファムを消そうとした。理由は己の娘をヴィルの元へ嫁がせたかったから。その辺りの話は本編で語られる間もなく、ヴィルに拘束された。ついでに他にもやらかしていた様々なヤバい証拠を列挙された。

ファムが家を焼かれ、大怪我を負い、殺されかけ、国を出る事になつた元凶。でもこの人がいなかつたらくろやみ国は誕生しなかつた。

* 精靈

レー・ヘン：

ファムに声をかけた銀色の精靈。

はじめは銀色の仮面のよつな顔をしていたが、ファムに名前とともに新しい姿を創つて貰う。ファム曰く「観賞用の顔」

新しい姿（本文引用）：「肩先にかかる程度の流れのような銀の髪、中性的な輪郭にすらりとした鼻梁と薄い唇。白くきめ細かな肌。そして銀のまつげにふち取られた、うつすらと青みがかつた灰色の瞳。穏やかな月夜を思わせる美しい青年」

ちなみにレー・ヘンの希望（大熊と見間違えるような雄々しい猛者）は却下された。

細身で、身長はファームよりちょっと高い。
黒髪にもなれる。

属性は闇。ランクは特級。
ちょつととぼけた性格をしているが、精靈の最高ランクなので、や
れば出来る子。

特級精靈としては若い方。千歳越えてるけど。

ベウオルクト（後述）よりピュアであぐれっしへ。

両手を変形させて攻撃するのが得意。

500年頑張つてようやく国王になつてくれたファームに敬愛の情を
抱いている。

名前の由来はオランダ語の雨

ちなみに登場時に着ていたボロの外套はぞうきんになつた。

ベウオルクト：
闇の精靈その2。
ランクはレー・ヘンと同じく特級。
顔など服から露出している箇所が布でぐるぐるまきになつていて、
服装は神官のような布を沢山つかつたバフバフした格好。
レー・ヘンの数倍長く活動している。くろやみ国の前身の暗病國のこ
ろからいるので、ある意味生き字引。
名前がどうなつたんだろ？と、国が存続してくれていたら嬉しい。

城、特に王の間の管理にこだわりがあるらしい。

軽い引きこもり。必要な時以外は俊敏に動かない。

気配なくとも本文中になくても、基本的にいつもファムの傍に控えている。

布の下の顔は大昔の偉人の模造だが、放置していく癒着してでろでろになつてしているので、ファムに見せられない。けど一応銀髪。

レーへンよりちょっと小柄。

名前の由来はオランダ語の曇り

旅の精霊：

白箱国内でファムを助けてくれた。
大地属性の一等級精霊。

本来は髪は薄い水色で、瞳はターコイズブルーをしているが、人間の街にいるときは偽装している。

首から下げるボーチには様々な種が入っている。
世界中の土壤を調べて回っている。趣味らしい。
13～4歳くらいの可愛い少年の姿をしている。
気さくで明るい性格。

オーフ：

白箱国に仕える光属性の特級精霊。
ずっと人間の傍で活動しているため、人間社会に馴染んだ価値観を持ち、人間に対してレーへン達よりもな会話、まともな対応を

する。

流れるような輝きをもつ黒髪と、美しいまつげを持つ。中性的な美しい顔立ちで、男なのか女なのかわからない姿をしている。でも一応男性の姿です。

身長は高い。

名前の由来はオランダ語の目

* その他の存在

西の祠の妖精：

白箔国首都の城壁の外、西の野原の片隅に存在する石の祠にいる妖精。

簡素な格好をした老人の姿をしている。

ファム曰く「意外な姿だけど、可愛いおじいちゃん」

国
はっぽくにく
白箔国：

ファムがいた国。街並みが白い。宮殿を中心として広範囲に街が発達している。

平地が多く草原が広がる国。

暗病国：
あんびょうこく

くろやみ国の前身。

大昔は栄えていた大国だったが瘴気が渦巻き始め生物がほとんど絶え、国民もいない状態だった。

精霊はかるうじて一一名いて、ほそぼそと国を守り続けていた。

他国では子供にきかせるお伽話に出てくるこの世の果てにいる闇の国としてよくない印象だけがかろうじて知られている。ほとんど忘れ去られた国。

島国で、陸地は昔に比べてだいぶ減っている。また城にはかつての大国の遺物や、施設が沢山保管されている。

登場人物と国の紹介 2（第一章終了時まで）（前書き）

第一章から出て来た人の紹介です。人でないものもいます。

第三章開始時までの状況などもざっくり軽く書いてあります。

初登場時すぐに名前がでてこなくて、話の途中で命名されたりするキャラなどもいます。

オマケで本編で言及されてない設定とかも書いてます。

登場人物と国の紹介 2（第一章終了時まで）

第一章から継続

ファム：

くろやみ国の女王。19歳、女性。
ヴィルに会つたため無理矢理城を出て死にかけ、一ヶ月眠るはめにな
つた。

時々髪が銀色になるようになってしまった。

王の間で影靈という精靈を創れるようになってしまった。

レー・ヘン：

くろやみ国の特級精靈。

基本的にファムの身辺護衛と田の保養とボケ担当。

ベウォルクト：

くろやみ国の特級精靈。国内で一番の古株。
ファムの教育に鬪志を燃やす。

旅の精靈：

大地の一等級精靈。

ファムを助けてくれた。

趣味は世界の地質調査。くろやみ国の土地を見て回つたが、何も言
及せずに国を出たので土の状態はまだよくないらしい。
ファムに黙つて植物園に勝手に果樹園をつくった。一応あらゆる果

物がある。

ヴィルヘルムス：

白箔国はっぴくにの国王。

ファムが白箔国にいた頃、恋人関係にあった。
ファムからはヴィルと呼ばれている。

以下第一章から

影靈

ハーシエ：

ファムが初めて創った影靈。

核はファム愛用の櫛。

創る時ファムがごちゃごちゃ考えていたので、色々な姿をとれる。

普段は子ウサギの姿をして王の間でファムを癒しているが、必要なときは銀髪のファムの姿になることができる。
喋り方はファムよりお上品。ただしまだ思念で創造主のファムとだけしか会話出来ない。

マルハレータ：

影靈その2

影靈として復活した過去の女王。この頃は血族即位なので幼い頃から帝王学を学ばされ、11歳で即位。大戦時代なので戦争も指揮し、自らも前線にたつて殺しまくり破壊しまくった。

後世の呼び名は「血霧の女帝」

これは空気の振動を使う広範囲攻撃（法術より原理の簡単で広範囲殲滅ができる氣操術）で、血が霧のように舞つたことに由来。

一見冷静なようでいてかなり凶暴な性格をしている。

9セントヒールを過去の優れた技術と美女補正で平気な顔してはきこなす。

ワイシャツに黒のパンツ姿。メンソールタバコとか似合いそう。ネイルには法術の仕込みがある。

外見年齢28歳

生前は黒髪 現在は銀髪。雨雲のような灰色の瞳。

マイクはアイマイクとリップだけ派

散々おちょくられたレーへンに対し苦手意識を持つ

ベウオルクトと面識有り？

胸はAもしくはB。あまりこの部分の話を探ると肅清されます。

ローデヴェイク：

影靈その3

マルハレータのペンドントから復活。

彼女の時代の將軍をしていた。戦闘中に死亡。

あだなは狂狼。女王には絶対服従、だけど戦闘狂だったから。

当時は彼の方が年上だったが、死んだ年齢が違うので蘇つたら同じ年になってしまった。

元々工員志望だっただけあって、機械工作とか得意だつたりする。かなり感覚が鋭く、神經質が増長してキレやすい性格になつたともいえる。

外見年齢28歳。

銀髪でぎらつく灰色の瞳。

団体でかくて顔はそこそこ良いが表情と皿つきでかなり恐い。
身長は2mを越える。サヴァより大きい。

人間

サヴァ：

初登場時21歳の緑閑国出身の青年。
じょっかんこくしゅじゆ

深緑色の短く刈られた頭髪と深い緑の瞳。目元を中心に顔の三分の一ほどが鱗のように堅く変質している。特に左目は爬虫類のような瞳孔をしている。他の肌にも鱗のような変質有り。

性格は幼い頃から外見で差別されたり嫌悪されて来た影響で無口で消極的な所がある。

もの静かで大人しいけれど、戦闘能力はかなり高い。

190くらいは身長ある。かなり細身。針金のような筋肉。
8~12歳ごろに國の騎士団に入団、かなり早いペースで出世して、
隊長格くらいまでいつていた。

とある騎士団に会うたびにスカウトされていたが、妹がいるので断つていた。

体内の竜脈の力を完全にコントロール出来ていないので素手で闘うのが苦手。相手を殺さずに戦おうとすると槍や棒をえらぶ。剣でも威力がありすぎて相手をまつぶたつにしかねない。なんという厨二。でも力の暴走はない。本人が穏やかで安定感のある性格をしているから。

純粹な肉弾戦だとマルハーレータ達と良い勝負するくらい、腕とセンスはある。

なにもなければ本屋とかパン屋とかやってそう

ゲオルギと海洋漁業してるので、現在の職業は漁師。

ライナ：

初登場時 12 歳の少女。

サヴァの元でシメオンと三人で暮らしていた。でも身体のことがあるから入院が多くなった。特殊体質を怪しい集団に目をつけられ、攫われて実験されかけて症状が一気に進行、くろやみ国へ来る事に。病の症状は身体の透明化。苦痛と麻痺と恐怖が襲う。

ファム女王が治療して、絵で描いて説明した方が早い外見になってしまった子。健気だけどしつかりしている。新たな自分の姿を確認した際は、羽根や角よりも髪の色を気にしていた。

胸は A カップ。これから成長予定（本人談）

シメオン（後述）のことは家族の感覚で接している。

シメオン：

初登場時 13 歳の少年。

明るい黄緑色のさらさらした髪に、女の子のように整った顔立ち。青みがかつた緑の目。

幼い頃の経験からかなり殺伐とした側面を持つ。ライナがいなければ殺戮マシーンのような人間になっていた。

ライナとその他に対する言葉遣いや表情がかなり違う。
緑閑国で神童と呼ばれた。文武両道良く出来る子。法術も精霊術も基礎だけ学習した後、オリジナル構成して駆使している。

竜脈の影響があるであろう高スペック。だが外見は普通の綺麗な顔立ちの男の子。中身を調べても普通。ベウォルクトが密かに詳しく調べたがっている。

ライナを実験につかつた怪しい集団を滅ぼし、裏に大御所の人物も

いたので身の安全のために国外追放の措置をとつてもらつた。

策略とかできちゃう子だけビライナが欠けると一気に精神面に安定がなくなる。極端な子。

身長はライナと同じくらい。これから伸びる（本人談）。

生き物

ゲオルギ：

緑閑国の竜。

竜の言葉を知つていると会話が出来る。レー・ヘンと仲が良くなる。いつたん帰国しようとしたら途中シメオンと合流して戻つて来た。

人？

イグサ族：

ベウォルクトがイグサ族と呼んでいる。くろやみ国先住民族。

背が低く、手足が太くて、顔には大人も子供も皆地面に生えている枯れかけの草と良く似たものがもじゅもじゅと生えている。男女の区別方法は不明。

イグサ族は30人程の集団で生活していて、基本的に島の沿岸部をなぞるように移動しながら生活している。

身体に草を編んだマントのようなものをまとつていて、遠目からだと涸れ草の固まりに見える。

もこもこ毛の動物を連れている。たぶんこの毛も生活に使用している。

鍋に入れた海水を火にかけて沸騰するやり方で蒸留して、塩と真水に分けて生活に使っている。主食は海藻と、魚介類。

ちなみにくろやみ国近辺の海で採れるものはファム達大陸からきた

人間の体には合わない。

イグサ族には長い間滞在する場所もあって家のようなものもあるが、そこは遠いらしい。

ファムは初対面で友好を確立することに成功した。

ベウォルクトはイグサ族の事を色々調べているらしく、通訳も出来る。

白箔国：

白箔国：

ファムがいた国。交易で栄える。歴史もあり優雅な国。

現在ヴィルヘルムスが王様をやつしている。

光属性が多い国。

緑閑国：

青嶺の山脈と深い森の中にある小国。白箔国と青嶺国に隣接。シメオンが引き起こした事件や、もともとの内部の腐敗で今弱体化しまくっている。古い価値観の国。色々大国の青嶺国に頼っている。内輪のじたじたのせいで属国秒読み。

竜の産地と天然石で有名。

青嶺国：

海を挟んでぐるりやみ国のお隣の国。よく戦争しているらしい。

赤麗国：

赤麗国：

韓國と並んで戰争が多かった。

登場人物と国の紹介 2（第一章終了時まで）（後書き）

2011/05/30

国によみがなふりました。

登場人物と国と団体の紹介 3（第三章終了時まで）（前書き）

第三章本編と

第三章関連の番外編の

登場人物と国と団体の紹介です。

登場人物と国と団体の紹介 3（第二章終了時まで）

ファム：

くろやみ国の女王。この國の方針はこの人によつて決められている。
城のシステムにだいぶ慣れてきた。

レー・ヘン：

くろやみ国の精霊。主にボケと日の保養担当。
ボケてはいるが隙はない。（多分）

ベウオルクト：

くろやみ国の精霊。

最近城の修理に力を注いでいる。

国土の管理、調査も積極的におこなつてている。

精霊ランキングの編集メンバー

ハーシュ：

くろやみ国の影霊。

創造主のファムとしか思念で会話出来なかつたが、最近言葉をつか
えるようになつた。

うさぎの姿だけでなく、人間の姿をとる時間も長くなつてきている。

ライナ：

くろやみ国の少女。
知らない人間が怖い。

女王の事が大好き。

シメオン：

くろやみ国の少年。

ライナの身に何かがあると即効でブチ切れる。

ローデヴェイクに叩きのめされた際にその事を言われ、惱んでいる。くろやみ国へ来る前に大陸で悪名を覇せたので、国でおとなしくしている。

サヴァ：

くろやみ国の青年。

元緑闇国の騎士だった。その頃は竜槍と呼ばれちよつと有名だったらしい。

魚捕りをしているが、自分にもつと何かできる」とはないと考えている。

ゲオルギ：

くろやみ国の竜。

元々緑闇国の所有だったが、脱走してきた。

サヴァの騎竜。卵から育ててくれたサヴァとは互いの分身かのよう連携して動くことができる。

レーへンとは会話できる。

海賊「黒堤組」

くろやみ国近辺を主な活動領域とする海賊

首領格は代々マゾロと名乗る。

最近代替わりした。

くろやみ国のように過去の遺産もいくつか所有しているが、持つて
いるだけで完全に扱えているわけではない。

一つの街ほどもある巨大船を母船として、様々な移動船を所有して
いる。

黒堤組の人間

カラノス：

黒堤組の組頭。

首筋の中程までの黒い髪は波のように豊かに波打つ。要するに天然
ペーマ。

はつきりした一重の目は左が黒で、右は透き通った青い瞳。
いつも不敵な笑みを浮かべている。

よく動く表情。サヴァほどではないが体格も良い。
整った容貌は女性にもてそう。（byファム）

人懐こい性格だが観察眼は鋭い。

欲しい物は即効で捕りに行く性分。そのせいでファムに即効でキレ
られる。

腰布に四本も剣を差している。

うち一本は精霊らしい。

左手には法術用の黒のグローブをはめている。

黒堤組の仲間たち：

若い側近が多く黒髪が多い。

血の気も多く先走つて行動する輩もいる。

お頭のカラノスに対しても物言いが容赦ないとこころがある。（その分信頼関係が築けているとも言える）

法術師や竜使いなど、人材は豊富な模様。

黒堤組の精霊

コトヒト：

かつて暗病国（アーヴィング）の精霊だった。一等級精霊。

普段は剣の姿で黒堤組の守りの精霊の一體として存在している。人の姿は、中性的な若者で、灰色の髪を一本の三つ編みにして、やや濃い灰色の瞳をしている。房飾りのついた墨色のゆつたりとした上着と揃いのズボン、布で出来たサンダルを履いている。

シシ：

黒堤組の組頭の護衛精霊。普段は剣の姿をしている。

灰色の、毛の長いライオンのような姿。ふさつふさである。

コトヒトがいつも手入れしている。

普段は剣の姿をしていて、マグロの指示や、危険が迫ったときに獣の姿になる。

元々は人工的に精霊を作り出す実験体のうち一體で、コトヒトが黒堤組につきあつのはシシのためでもある。

？？？

”くろの騎士”

大空騎士団の競闘大会に一般参加として参加した全身黒い鎧に包まれた戦士。

突如現れたにもかかわらず、圧倒的な強さを誇り、騎士達と闘つっていく。

得意武器は槍。槍としての使い方の他に薙刀のように振り回すこともある。要するに”剣のように槍を扱う”といつ、かなり無茶苦茶な使い方をしている。

その正体は・・・

彼の活躍のおかげで大会勝者をあてる賭博会は大混乱になった。

黒髪の青年：

肩に乗つた黒い小鳥とよく漫才をしている。事情があつて闘技場内に入れないらしい。

灰色のショールの女性：

“くろの騎士”の武器を届けに来た。

黒い小鳥：

黒髪の青年にツッコミをこられる

大空騎士団・・・大陸で最も規模が大きい騎士団。いくつかの国の支援によって騎士団として独立しており、大陸にその名を轟かせている。誰でも参加できるという意味合いから大空。

大空騎士団の人間

エシル：

大空騎士団の団長。

紫の髪に紫の瞳の男性。

深くよく響く声をしており、いつも堂々としている。実力も騎士団トップクラス。

ユリアの事を大切にしている。想いが届いているかは不明。仕事に手抜かりはないが、自分に都合よく動かすのも巧い。

ユリア：

大空騎士団の副団長の女性。

細い銀フレームのメガネをかけ、深く澄んだ湖のような水色の瞳に、やや緑がかつた青色の髪を肩のあたりでゆるく束ねている。大人しい、「図書館にいるのが好き」と言いそうな外見（あくまでも外見の話）

かねてからサヴァの噂を聞いて、故郷も近いこともあり、憧れをいだいていた。（ヒロチ恋愛）

エシルに対しては、想いはいちおう理解はしているが受け止められない。

あまりそっち方面で感情が動かないらしい。

メールト：

”くろの騎士”と闘つた騎士その1。負けた後、かの者について質問された。元々法術がメインの騎士で、今大会は戦略を練りに練つて参加し、本戦まで進んだ。その分析眼から”くろの騎士”的方の特徴を正確に読み取っていた。

ミニット：

”くろの騎士”と闘つた騎士その2。一本の剣を扱う。かなりの実力者で、前回大会の三位入賞者。実力者と闘つ事に喜びを見出すタイプ。丁寧な言葉づかいをする。武器マニア。

青峰国関係者

ジエスル：

大空騎士団の青峰部隊の管理者。
紺碧色の瞳にまっすぐな青い髪。
友人の依頼で闘技場を駆けまわった。
巻き込まれ体质。

赤麗国関係者

紅濫将軍：

赤嶺国の騎士で、軍属。

紅の髪がぼさぼさすぎて田元が隠れている。

明朗快活な性格だが、凶暴。

サヴァより大きい。かなり強い人。前回の大会優勝者。

頑丈な武器を沢山持つていたが最近銀髪の人物とやりあつて破壊してしまつたらしい。

白箔国関係者

ルトガー：

白箔国から派遣されている人物。赤麗国に現れた銀髪の二人組を追う途中で闘技場に寄つた。金の小鳥を連れている。

第一回 指手お礼詫め合わせ（設定ネタ）（前書き）

第一章終り時くらこの頃の話です。

第一回拍手お礼詰め合わせ（設定ネタ）

ベウォルクト「『声援ありがとうございます。折角ですので、お礼にさわやかですが我が国民の情報を公開いたしましょう』」

髪の長さ（短い順）

サヴァ

ローデヴェイク

マルハレータ（前髪は長い）

シメオン

レーへン

ライナ

・

ファム＝ハーシュ

・

身長

ライナ

シメオン

・

ファム＝ハーシュ

マルハレータ（ヒール無し）

ベウォルクト

レーへン

サヴァ
ローデヴェイク

体重

<<女王権力により機密情報となりました。>>

レー・ヘン「公開できる分で紹介しますと、一番軽いのはまうさぎ状態のハーシュで、一番重いのはゲオルギです」

年齢
ハーシュ（0歳）

ライナ
シメオン
ゲオルギ
ファム
サヴァ
ロー・デヴェイク（享年 + 復活後）
マルハレータ（享年 + 復活後）

数百年

レー・ヘン

・ · · · ·

ベウオルクト

ハーシュ「せつかぐの雑談スペースで、皆さんがアンケートをとつてみました」

好きな食べ物、苦手な食べ物について

ファム「甘いもの、美味しいものはなんでも大好きよ。高級すぎる食べ物はちょっと苦手かも」

ライナ「豆料理と根菜が好きです。苦手なのは脂っこいものと、あんの、兄さんが作ったシチューが・・・」

シメオン「ライナが作ったものは何でも好きです。どれもおいしいです。知らない人がくれる食べ物が苦手です」

サヴァ「好物はとくにない。昔一度だけ菓子を作ったが酷い味だった」

ゲオルギ「ギュー」（レーへン訛・歯）たえのある果物が好きだそうです。苦手なのはミミズだそうですが

マルハレータ「水。粘っこいものと甘酸っぱいしたもんが食べにくこ」

ローデヴェイク「肉だな。肉」

マルハレータ「こいつは玉葱が嫌いだ」

ローデヴェイク「うるせえ！」

レーへン「応援ありがとうございます。御礼として先日行われた国民体力測定の様子を一部公開しましょう」

足の速さ

<測定方法>

・練兵場にて200m走

・術使用・・・なし

(測定者：レーへン、ベウォルクト)

<結果：早い順>

ローデヴェイク、ゲオルギ（飛ばない）

サヴァ（鎧無し）

シメオン

マルハレータ（ヒール有り）

・
ハーシュ（人型）

・

ファム、ライナ（ライナが2回転んで、途中から一緒に歩いた）

ファム「ゼー、ゼー、ああ体力すいぶん落ちちゃつてるわ。ライ

ナ大丈夫？ 足に怪我してない？」

ライナ 「大丈夫・・・です。ちょっと擦りむいただけで」

ファム 「マルハレータはなんであの靴で走りきれるのよ・・・。シメオンはライナのこと気にしつつちゃんと走りきったわね」

ライナ 「立ち止まつたら1時間口をきかないって約束したんですね」

ファム 「それ脅しになるのね・・・」

レーへン 「お疲れさまです、ファムさま」

ファム 「ねえ、どうしてかけっこに精靈が入つてないの？」

レーへん 「我々はその気になれば音速くらいは出せるので、一緒に走つてもあまり意味が無いですよ」

ファム 「そ、そつなの・・・精靈つて凄いのね」

レーへん 「応援ありがとうございます。御礼として先日行われた国民体力測定の様子を一部公開しましょう」

腕力

<測定方法>

- ・腕相撲
- ・術使用
- ・全員一緒だと危険なので一部にわけ実施
(測定者:レーへん、ベウォルクト)

<結果:強い順>

(一部)

ロー・デ・ヴェイク

マルハレータ

サヴァ（鎧無し）

シメオン

(一部)

ライナ

ファム

ハーシュ（人型）

マルハレータ「おまえ、手を抜きやがつたろ」「
サヴァ「加減がうまくできないんです」

マルハレータ「つぶれる勢いで一度やってみろよ、ほひ」

サヴァ「いや、潰すのはちょっと・・・」

マルハレータ「おれは影靈だから平氣だ。やってみろよ」

サヴァ「・・・遠慮します（背後からロー・デヴェイクが睨んでいるんだが）」

レー・ヘン「どうして今回精靈はいないんですか？」

ファム「アナタなら冗談で手を刃物にしてマルハレータと勝負しかねないと思ったのよ。あとベウォルクトがロー・デヴェイクに本氣で何か仕掛けそうだったから」

レー・ヘン「なるほど」

ファム「いちおうこれ真面目な体力測定なのよ」

銀色のものがたり（第一章読了推奨）（前書き）

本編 第一章を読了後に読む事をお勧めします。

銀色のものがたり（第一章読了推奨）

ワタシが生まれたとき、すでにこの国には人間がほとんどいませんでした。

そしてワタシの成長が落ち着く頃には、精霊もほとんどいない状況になっていました。

そしてとうとうこの大地にはワタシと、今はベウオルクトという名になった闇の精霊が残つたのです。

ワタシは人間の定義の仕方では特級と言うタイプなのですが、特級精霊は生まれてしばらくは誰とも会わず、ひつそりと世界を学ぶのです。どう学ぶのかはファムさまにわかるようによく言葉では説明が難しいのですが、精霊の世界というのがあって、そこで大きくなるまで過ごすのです。

そして成長した特級精霊は、たいていどこかの国に所属します。これは精霊の世界での決まりで…ええそうです。ベウオルクトも特級精霊ですよ。

ああ、先日助けてくれた大地の精霊は一等級の精霊です。

人に似た姿をしているのは一等級以上、

それ以外の姿で意思疎通が出来るものが一等級、さらに意思疎通が難しいものが二等級、

そして姿も形も不確かなものを薄級といいます。

ちなみにすべて人間側が決めた定義ですから、ワタシやベウォルクトは全ての精霊と意思疎通ができます。

成長してから過じした数百年は、あまり記憶に残っていません。ベウォルクトと会話した回数もそうないし、お互い城のどこかで過ごして数十年会わないなんてのもよくあることでした。会話する用事がなかつたのです。

ベウォルクトは、ワタシより遙かに長い年月を過じし、この国に沢山の人がいた頃の事も知っています。ですが全ては過去の事。過去の情報はワタシも『生まれた時からすでに知っています』ので、ワタシはベウォルクトに昔話をせがむ事などありませんでした。

あの頃の事は… そうですね、すぐに思い出せる範囲ですと、城の設備の点検や、国に生えている涸草かれくさを数えて過じしていましたね。

それからまた時が経ち、気がむくと世界中の精霊達からくる情報を眺めていたワタシは、ふと、この国の王をよそから連れてくる事を思いつきました。

何かを思いつくなんて久しぶりの事でした。もしかしたら、生まれて初めてだつたのかもしません。

ワタシはその思いつきに興奮し、さつそくベウォルクトに相談しました。ベウォルクトもワタシの考えに同意し、どのような人物がふさわしいか話してくれました。

そしてワタシはベウォルクトに国の管理を頼み、生まれて初めて国外に出て、王になってくれる人を探しました。

すべて手探り状態からでした。

知っているのと実際に見てみる事はまったくの別物でした。人間

のたくさんいる街に驚き、闇の属性を持つ人を見つけては声をかけようとしたが、緊張してしまい、落ち着いて声をかけられるようになるまで百五十年ほどかかりました。それからその土地の言葉で話しかけることに気がつくまでに五十年。会話が成立するまでに一百年ほどかかりました。

いやあの、ずっと立ちっぱなしという訳ではないですよ。定期的に国に戻っていましたし、適正に合った人が生まれるまで待つ事もありました。

闇属性で、気脈を扱えるというだけでも数十年に一度生まれるかどうか分かりませんし、かつ元氣のある方で、この国の王になってくれそうな人物というのは、本当になかなか見つかりませんでした。

そしてようやく、ファムさまに出来たのです！

ファムさまはとても素敵な方です。

ワタシに新しい姿をくれましたし、身体もあつたかくてやわらか……わっ！

「枕投げないで下さいよ」

「アンタが変な事言出すからよー、そして避けないでよー。」

「ファムさまが昔話をしろと言つたんじゃないですか？」

「もう、寝るわ！」

そう言ってファムさまは毛布を引き上げ、しばらくすると本当に寝入ってしまった。

ワタシは床に落ちた枕を拾い、ベッド脇のテーブルにそっと置いた。

「本当に、来てくれてありがとうございます、ファムさま」

あなたがいなくなるという事に対し、ワタシは恐怖を覚えるようになりました。

治療中に誤作動が起きた時も、今回も…

実は、ベウォルクトと話し合った結果、体内がすっかり落ち着くまであえてずっと眠つてもらっていたのですよ。

こんなことは、もう一度とあってほしくないですから。

あの男は邪魔です。ファムさまの心を、意思を乱します。できれば消してしまいたいです。

白箱国のが守っていますが、頑張ればワタシひとりでも対処できるでしょう。

けれど…消せばファムさまはワタシを許さないでしょうね。きっと枕を投げるどころでなく怒るのでしょう。

ベウォルクトにも軽率だと注意されました。

ワタシは眠るファムさまに触れた。

肌に触れる、呼吸している、生きている事がわかる。

ワタシの声に答えてくれた人。願いを受け止めてくれた人。人間の命は、とてももろい。

ワタシのすべてをかけて守ります。

どうか、幸せになつてください。

ワタシのたつたひとりの王なのだから。

銀色のものがたり（第一章読み推奨）（後書き）

ちょっと設定の補完っぽい内容なので番外編に分けてみました。
例によつて詳しい後書きは活動報告ページに書いてます。

薔薇の日（本編開始前）（前書き）

本編が始まる前のファームとヴィルの話です。

今日は一年のうちで一番忙しくて、稼げる日。私も日が出ないうちから働き通しだったわ。

数日前から市場から届けられる花を受け取ったり、ラッピング用の準備をしたり、鉢植えを飾り付けたり…当日はいつも何倍もの作業が待ち受けていた。

「じゃあ、これで失礼します」

「おつかれさま、ファムちゃん」

「お疲れさまです」

忙しかつたけど、花を買って行く人たちの、贈る人を思つてうかべる笑顔に心が温まった。

夜遅くなつてようやく店の仕事が终わり、私は家路を急いだ。道行く人たちはほとんどが赤い薔薇を持つた恋人同士で、しかもみんな密着して歩いている。

私は薄手のコートの襟を閉じて、ポケットから小ぶりの包みを解いてあめ玉を取り出し口に入れた。甘酸っぱいサクランボ味に思わず吐息が漏れる。

小道から広場に出ると、やっぱり恋人達だらけ。ガス灯に照らされたベンチのいくつかには密着した二人組が座つている。あら、あの隅にいるの、お菓子屋の二人かしら…いつのまにくつついたのかしら

見知つた顔も見知らぬ顔も、皆それぞれの甘い世界に漫つてゐる

のを眺めて、自分には帰つても冷えきった家が待つて居ることを思い出した。

「今日は疲れたし、何か暖かい物でも買って帰る?」「ではそこ通りに新しく出来たデリカテッセン(総菜屋)はまだですか? 今夜はサービスでホットワインがつくそうです」「それって素敵! ロロッケはあるかしら? …って、ヴィル? 振り返るといつの間にか後ろにヴィルが立っていた。口に手をあててなにやらクスクス笑っている。

「お疲れさま。ファーム」

「ちょっとなんて格好してるのよ! 風邪ひくわよ! マフラーもコートも無いじゃない! 慌てて私の黒いマフラーを外してヴィルにぐるぐると巻き付けた。

「そこのかフェにいたんです。窓からあなたが見えたから思わず手ぶらで出て来てしました」

「何してるのよ。取りに行きましょう」

「はい」

ヴィルの手をとつて歩き出すと、さつきまで重く感じていた体が嘘のように軽くなっていた。

「飲食店も特別な飾り付けをして遅くまでやつて居ますよ。行きません?」

「今日は疲れているから、あまり華やかな場所に行きたい気分になれないわ。それに、こんな手だし」

沢山の薔薇を扱つたからあちこちアゲがささつてしまだけぢべする。

田の前で軽くひろげた私の手を、ヴィルはそつとつかんだ。

「ヴィル?」

「手がこんなに荒れてしまつて…」

「み、水仕事が多いから…」

ヴィルは私の両手を自分の両頬にあて、目を閉じて深呼吸した。
「こうしていると、ファムに包まれているような気持ちになりますね」

私は手をのばしているだけなんだけど！

腕が疲れて来たので、ヴィルの頬を両側からつまむ。

「ならもっと幸せそうな顔しなさいよ。こう、口の端を横に伸ばして、上に持ち上げるのよ！」

私がむにむにと頬を引っ張つてあちこちに動かすと、ヴィルは驚いたように目を見開いて私を見て、それから自分で頬の筋肉を動かした。

「こ、こうですか」

「そうよ、もつと大きく、顔全部の筋肉で動けばもつと素敵になるわ」

「そういった笑みはした事が無いのですが…」

「練習と、気持ちが伴えば自然にできるわよ」

「気持ち…ですか」

「そうよ、心の底からの気持ちよ」

「できたら何かいいことがありますか？」

期待した目をしているわね。こういう時だけ、ヴィルの瞳は雄弁になる気がするわ

「素敵な笑顔ができたら、私から」「褒美をあげましょう」

私はお手本のつもりで目一杯の笑顔で彼に抱きついた。

「では努力します」

「それにしてもヴィル、今日は突然どうしたの？ 次の約束の日はもつと後よね」

カフェから荷物を取つて戻つて来たヴィルは手に持つていた白いマフラーをゆっくりと私に巻き付けてきた。なにこのマフラー、ものすごく柔らかくて、感動するくらい手触りがいいわね！

「今日は薔薇の日の行事が沢山あって、色とりどりの薔薇を見てい

るついにファムに会いたくなつたんですね

そんなこと言われて一気に顔が熱くなつてきた。耳まで熱痛い。

「そ、そういうえば今年はやけに街の飾りが多かつたわよね。通りのあちこちで芸術家の作品を飾つてあるの、見かけたわ。国が働きかけて街中も薔薇で飾られていたし。お偉いさん達もたまには素敵なことをしてくれるのね」

「ええ。…楽しかつたですか？」

「うーん、どうしてか知らないけど他の街は色んな薔薇を使つていのに、この街だけ赤い薔薇だけで飾るつて指定があつたらしいの。おかげで店に置く赤い薔薇が足りなくつて、隣町まで買いに走らされて大変だつたわ」

「そうですか…」

「どうかしたの、ヴィル」

「いえ、ここ数日の疲れがちょっと…」

「大丈夫？ 体調悪いならもう帰る？」

「いえ、平気です。慣れてますから」

「そ、そつ？ あ、そうだ」

私は鞄の中から紙袋を取り出した。

「これね、ジャムにする予定で貰つた売れ残りの花なんだけ…」

一番綺麗な形をしている薔薇を取り出して、そつとキスをする。

「はい、『あなたに幸せが訪れますように』…」

そう言って笑顔で薔薇をヴィルの胸元のポケットに飾る。

「今日は薔薇の日だつたから、こいつやって薔薇を卖つたのよ」

「…キスをして？」

「ええ。幸運のおまじないなの。特別料金の大薔薇を買つてくれた中で、希望するお客様におまけです。これは売れ残つた普通の薔薇だけど」

薔薇の日は元々ある貴族の女性の事が好きだつた平民の青年が、

妖精が作った薔薇に想いを託して贈った昔話が元になつていて。その愛の告白の伝説にちなんで、うちのお店では売り子をその妖精に見立て、薔薇にキスをして幸運のおまじないをかける演出をした。店長がこういった事考えるのが好きなのよね。

「あなたはおまじないつきで何本売りました?」

ヴィルは胸元の薔薇を見つめながらつぶやくよひと言つた。

「え…白が4本とピンクと黄色が3本だったから…たぶん10本かしら? 私ほとんど薔薇を買いに行つたり花束を作つていたから売り子に長く立つていなかつたの」

「そうですか…」

ヴィルはため息をついた後、ゆっくりと私の腰に腕をまわして抱きしめて来た。

「どうしたの?」

「10個ください」

「ええ? な、何を?」

「幸運のおまじない、私にください。10個、いえそれ以上。そうでないとあなたがばらまいた幸運を探して街中を駆け回りたくなる」えーとつまりそれつて

「妬いてるの? 花にちょっとキスした事が?..」

「ええ、ものすごく」

そんな真剣な目で見つめられて…

「赤い薔薇にはしなかつたから良いじゃない」

「でも、キスは贈つたんですよ」

「そ、そっだけど。あのね、ヴィル。ここ道の真ん中よ?..」

押しの強いヴィルから逃げるように私が早歩きで先に行こうとする。彼は手を掴んできて引き止めてきた。

「貰えないなら私からおまじないをしますよ」

「それ何回やるつもり?..」

「何回がいいですか?..」

「わ…わかんないわよ…」

「ヴィルの田がなにやら本気だったので、私はポケットから飴の包みを取り出して、すばやく中身をヴィルの口に放り込んだ。

「それ食べて我慢してちょうどだい！」

歩き出して数歩、まだ立ち止まつたまま無言で飴を食べているヴィルを振り返る。

「う、うちに着いたらおまじないしてあげるわ！」

投げつけるように叫ぶと、ヴィルは田を見開いて、それから微笑んだ。さつき指導したとおりの笑みだわ。

「初めてあなたのお家に招待してもらいました」

「さ、さつさと暖かいご飯と、ホットワイン買って帰りましょう」
あの田は、ヴィルの胸元を飾る赤い薔薇が田に入るたびに、胸のうちがくすぐったくなつてしまふがなかつたわ。

ちなみに、その時の私はかなり動搖していたので、背後でちこちづぶやく、ヴィルの声に意識が向いていなかつた。
「街中を飾るのはやりすぎましたか…」

「薔薇の田」は、想いを薔薇に託しして相手に贈る口。

白い薔薇は尊敬の証

黄色い薔薇は友情の証

ピンクの薔薇は感謝の証

そして赤い薔薇は情熱的で、真摯な愛の証

あの日、私の街を赤い薔薇で飾るように誰が指示したのかを知つたのは、ずっとずっと後になつてからだつた。

薔薇の日（本編開始前）（後書き）

ファームの勤める店は普通の花屋ですがサービス旺盛で商売熱心。ちなみに妖精って、あの妖精とおなじような外見です。

薔薇の意味は花言葉を元にしていて、本来はもっと細かく複数の意味があります。

焼けば良いってものじゃない（第一章後半頃）（前書き）

第一章後半頃の話です。

焼けば良いつてものじゃない（第一章後半頃）

「うーん、今度またお城の資料から新しいレシピを探してこなきや」この国の女王の仕事のひとつに、献立作りがある。調理室にある材料を調べて、それらを効率的に使って数日間分の料理を決めていくお仕事。限られた材料の中で考えるのって結構頭使うわ。

「ねえレーへン、料理ひとつくらい覚えてみない？」

毎日の「」飯はほとんどが材料から作っているのだけれど、こう大変。今もシメオンとサヴァアが乾燥が終った大豆を加工しに行っているし、ライナが籠の中から野菜と果物を取り出して台の上へ並べて、加工するものとそのまま食べれそうなものとに分けている。

街で暮らしていた頃はある程度まで加工された物も手に入ったり、疲れたときは総菜屋で買えたりもできただけれど、ここでそれなりに美味しい物を食べようとすると自分達で用意するしかない。

お城に元から貯蔵されていたり、全自动で作られて加工してくれている食材もあるのだけれど、自分たちの食べたい料理となると、それだけじゃ足りない。

緑閑園の料理も作るようになつて必要な調味料が増えたので、精霊達も交えみんな総出でお城の設備を動かす事もあつたわ……

毎日の献立は私とライナとシメオンで作っている。

ちなみに調理担当にサヴァアがないのは、彼は男の料理というか、恐ろしく簡単なものしか作れない。騎士をやっていた頃はライナとシメオンが家事を全部やっていたらしいわ。

精霊達は調理室で私たちと一緒にいる事が多いけれど、まず見て

るだけだし、進んで手伝いもしようとしてこない。今も献立を決めていた私をレー・ヘンはいつもの涼やかな顔をして眺めているだけだった。

「料理ですか？ それって人間用の食事製作のことですよね」

「そうよ。アナタが時々手伝ってくれている食事製作よ。アナタかベウォルクトが一品でも料理を覚えてくれると、私、とおつても嬉しいのだけど」

「ファームさまが喜ぶのでしたら、挑戦してみましょう」

私の言葉に、レー・ヘンが眞面目な顔で宣言してくれた。

「そうと決まれば、気まぐれな精霊がその気になつていつに早く実行よ！」

「なにが良いかしら？ ライナ、何か良い案ない？」

私の隣で今晚のスープに使う野菜を選んでいたライナに尋ねてみた。彼女は12歳ながらひととおりの料理を作れるので、とても助かっている。サヴァアが食生活に頼着しないので、自分で作るしかなかつたらしい。彼女の体調が良くない時はシメオンが家事をしていたので、彼も料理が得意になつたのだそうよ。本当にしつかりした子供達だわ。

「パンケーキなんてどうですか？ シメオンも料理覚え始めの時によく作つてくれたんです」

「そうね、あれなら材料を混せて焼くだけだからそう難しくないわね」

「おやつになるし、パン代わりに料理と一緒に食べる事もできるわー！」「私、準備しますね！」

そう言つてライナが食料室へ行つた。

金属製のボウルの中にふるいにかけてキメを整えた小麦粉と、塩

と砂糖とふくらし粉と、出来たばかりの豆乳を入れて混ぜあわせる。少しの間涼しい所にボウルを置いて材料を馴染ませて、生地の完成。

「いい、レーへん。私の手元の動きと、生地の様子をよっていく見ておいてね」

「はい」

私はスープをよそう時に使つてゐるレードルで生地をすくい、暖めて油をひいたフライパンに流し落とす。生地が広がつた頃にフライパンを持ち上げて濡れ布巾の上に数秒置く。

「こうやって、フライパンの温度を一度下げるのがふくら焼き上げるための秘訣なのよ」

フライパンを加熱台の上に戻して、表面が乾いて来たら木べらでさつとひっくり返す。小麦色に焼けたら、お皿に移して、一枚完成!

「さあ、やつてみて」

私の動きをじつと見ていたレーへンは、うなずいてレードルを受け取つた。

「わかりました」

銀髪の綺麗な顔をした精靈はいたつて真面目な顔で散々な結果を作り出して行つた。

1回目、油をひくのを忘れて、生地がフライパンにこびりつく
2回目、弱火でゆつつくり焼いて、中まで熱が通らなかつた。
3回目、しつかり焼いて、表面が真っ黒に。

4回目、また生焼け

5回目、生地が無くなつたので追加。粉を間違える。しかたないので刻んだ野菜を入れて焼いて夕飯の主菜にしたわ。

そして6回目に突入。

ちなみにレーへンの特訓中、隣ではライナが桃のシロップ煮と野

菜の酢漬けを完成させて瓶に詰め終わっていたわ…

さすがの失敗続きで投げ出すかと思ったのだけど、500年間人探しをしていた精霊には忍耐力があった。

嫌な顔せず粉だらけになりながら一生懸命に黙々と私の特訓に耐えて、手を動かして、失敗する。

なんだかんだと失敗続きで10回目になつた頃、レーへンがちょっと疲れた顔つきで私の方を向いた。

「ファムさま」

「なに？」

「別の方法を使ってもいいですか？」

「？ 何かあるの？ いいわよ。ちゃんと私が食べられる物を作つてね」

レーへンは私の返事を得ると加熱台の下の戸棚から取つ手のついた真っ黒な箱を引っ張り出してきた。それを調理台の上に置き、隅のボタンを押すと箱は本のように開く

「な、なにこれ」

凹凸のある箱の中にレーへンは生地を流し込み、元の通りに閉めてまた違うボタンを押した。

しばらくすると良い香りがしてきて、何かを知らせる音が箱から聞こえてくると、レーへンが箱を開く。

「できました！」

嬉しそうにしている精霊の横から覗き込むと、格子状の凹凸の形をした生地が小麦色に焼き上がつていた。

手のひら大のできたのそれをひとつ手に取つて、かじつてみる。

「どうですか？」

「おいしいけど…」

「ワッフルというんです」

私が教えようとしていたパンケーキはどうなつたのよ。

なんだか腹が立つたので、ワッフルと一緒に食べるための泡立て

たクリームやシロップを作らせようとしたらまたレーへンは失敗して、今度はソフトクリームというのを作った。

アイスクリームよりも柔らかくて、すっごく美味しかったわ。でもやっぱり、なんだか腹が立つたので、今でも時々レーへンにパンケーキ焼きの特訓をさせている。

銀と灰（第二章「海賊と情報 2」読了推奨）（前書き）

銀色と灰色の雑談です。

第三章の「海賊と情報 2」の直後です。

くひやみ国の城で最も高い場所は細く長く建ち上がる塔だ。

現在はもうほとんど使われることのない通信用のもので、中にはおろか外側にもろくな足場が存在せず、人間が立ち入ることはできない。

元々人が目にすることができるないものをやり取りするためのそれは、普段ほとんど暗い灰色の雲に隠れている。

けれど、今夜は上空に風がでていて珍しく雲が薄くなつており、精霊の視覚だと塔の先からは城や国の荒れ果てた大地や、遠く海の水平線までが雲の隙間から見ることができた。

レーへンは気象の観測と、警備する意味も含めて、計測機器を持つて塔の先端に立ち、その生氣の薄い景色をじっと見つめていた。

城の人間たちは寝静まり、女王もよつやく先ほど寝付いたところだ。

彼女が泣いているのには気がついていたけれど、浴室には侵入してはならないと厳命されているので、レーへンは何もすることができなかつた。

ベウオルクトには、そういう時は何もせずそつとしておくものだ

と言われたが、その意味するところがまだうまく理解できず、レー
ーンの内でモヤモヤとしたものとなつて重たい霧のように漂つてい
た。

「いい場所だね。国が見渡せるし、海も見える。そして孤独になれ
る」

声が聞こえたのはすぐ足下からだった。

「おや、コトヒトさん。今日はよく会いますね」

ほとんど柱しかない状態の塔の、レーへンが立つ先端から一段下
の突き出した部分に、いつの間にか黒堤組といふ海賊に所属する闇
の精霊、コトヒトが腰掛けており、レーへんに向かつて話しかけて
きていた。

「本当にレーへン。奇遇だ」

コトヒトはそう言い、穏やかに微笑んだ。細く長く編まれた灰色
の髪と墨色の衣が風に煽られてはためいているが、特に邪魔にする
様子なく話している。かくいうレーへんも、風に煽られる銀髪や衣
服を気にする様子なく会話を続けている。

一応城の一部だが、内部ではないので、レーへんはぐるやみ国の
精霊ではないコトヒトがここにいることに言及しないことにした。

国外の一等級以上、それも闇の精霊と会話する機会はさうあるも
のではない。

「黒堤組のみなさんはどうじつします？ 食べ物は口に含いましたか
？」

女王がこの国に来た当初、食べ物に関してが一番不平不満が多か
ったのを思い出し、レーへんは尋ねてみた。

「肉がない、味が薄いと文句を言つていたが皆じつかり食べ尽くし
ていたよ。まあ、今回は前代の組頭の送別式の為に来ていたから、
それなりに食料や酒なんかも持つてきていたし、賑やかにやつてい

たさ。今は歩哨を残して、あとは寝ているよ。組頭はシシが実体化して傍にしている

「シシは面白いですね。純粋で、無知で、熱心だ。あれは主以外にはなつきませんか?」

「許可があれば少しさはなつくよ。仲良くしたいのかい?」

「いえ。ただ、うちの女王が触りたがっていたんですよ。ふさふさした毛並みが気持よさそつだと」

「ワタシが手入れしているからね。歴代の組頭はたいていシシを寝の枕に使っているよ」

その話を聞いて羨ましがる女王の姿がありありと浮かび、レーへンは思わず微笑んだ。

「あなたはどうしてこの国を去つて、あのよつな姿になつたのですか?」

精靈、特に一等級や特級になると、「己の姿にもこだわりが出る。初めは違和感があつたが、レーへンも今の姿が気に入つていて、ベウオルクトにいたつてはずっと同じ姿を守り続けている。それを生き物の形態ですらなく、人間の道具にするところのは、精靈にとってまともな発想とは言えなかつた。

「国を去る人々が気になつたんだ。それでずっと付き添つて、その先を見てみようと思つた。なにより滅び行く国を見ているのが辛かつた」

「トートは遠くを見上げるように視線を逸らし、言った。

「けれど特に何かしたい事もなかつたし、国を出ても人々は争いや揉め事ばかり起こしていた。そのまま精靈としての生をやめて消滅してもよかつたんだけれど、シシがまだ安定しない頃でね。そばにいないと自己崩壊しそうだつたから、シシと同じ形でいることにしたんだ」

レーへンは自分が同じような立場になるのを想像してみた。けれ

ど、未だかつて消えたいと思つたことはないが、ある存在が気になつて、ずっとついてこなつた事には共感できた。

「しばらぐ経つて、そつ、300年くらい前かな、傍観するのにも飽きたから、ときどき体を動かすようになつたんだ。きっと君の影響だ」

「トヒトはレーへんに田線を戻した。

「ワタシですか？」

レーへんはちょっと驚いて、瞬きをした。

「眠つていた状態でも、遠いどこの土地で君がこの国の王を探して奮闘している事を感じていた。やり方はちょっとどうかと思つてらじこまぢりつこしかつたけど、何もしなかつたワタシよりずっとましだつた。おかげで、また活動しようといつ氣になれたよ」

「それはどうも、光栄ですね。あの事は本当に手探りでしたから」

「ベウォルクトは変わったね」

しばらぐ言葉が絶え、時間をおいてトヒトが口を開いた。

「前はあんな感じじゃなかつた」

「ずいぶん元気になつてきましたよ。王の間を破壊された時なんて、激怒していましたし」

「たしかに、あんな大穴あけられると怒りもするだらうよ。凄いね、一体どうしたのやら」

そういうえば、彼らの時代にトヒトはいたのだろうか。あの一人と会わせればトヒトは過去を懐かしみ、喜ぶのだろうか。

レーへんはふとそんなことが気になつたが、つい先ほど行なわれた国の大議で危険過ぎる彼らのことは外部に對して機密事項になつたので、特に口にしないでおくことにした。

「この国も賑やかになつてきてるんですね」

「楽しそうだね。もう居られないなつたワタシは、ちょっと寂しいな

つま先をぶらつかせてそうコトヒトは言った。

「あの海賊がアナタ」と婿入りでもすれば戻つてこれますよ。ありえない話ですがね」

「難しいのかい？」

レーへンはしゃがみ、髪を搔き上げて苦笑した。

「ファムさまには未だ忘れられない男がいるんです。腹立たしいことですか？」

「おや、精霊が嫉妬とは、珍しいことだ」

コトヒトは目を見開いた後、吹き出すようにして笑つた。

「嫉妬かどうかは、ただ、ワタシは我が主が健やかに、幸せでいてほしいだけなんです」

レーへンは首をかしげて、微笑んだ。

「うーん、なんだか昨日は変な夢を見たわ

「どうしましたか、ファムさま。どこか体調不良でもありますか？」

「うーん、大丈夫よベウォルクト、ただ夢を見たの。ぼんやりとか覚えてないんだけど、レーへンとコトヒトが城の高い場所で仲良くお喋りしているの。コトヒトがどうして国を離れたとか、そういう事を話していた気がするわ

「おそらくそれは実際の事ですよ。きっと睡眠中に意識が城と混ざつたのでしょうか」「

『今日の天気はいつもと同じ曇りです』と同じ調子で、ベウォル

クトは言つ。

「・・・それって大丈夫なの、私」

「王の間が修理中ですのでファームさまと城とのつながりが不安定な
のかもしれません。意識がこうして戻っているのですから、問題は
ありませんが、ファームさまが休息できないのでしたら話は別です」

私は伸びをした。体がこわばつて、重苦しい。

「言われてみれば、あまり寝た気はしないわね」

「それはよくありませんね。少々調整しておきます」

「お願いするわ」

それにしても、精霊って変な場所でお喋りするのね。

銀と灰（第二章「海賊と情報 2」読了推奨）（後書き）

雑談を書いてみたのですが、長くなつた上に本編にあまり関係ない内容なので、番外編に分けました。

微妙にレー・ヘンが成長している気がしないでもない。

べの騎士の脱出劇・決勝・（第三章「べの騎士と闘技場 5」の続）（説

第三章 べの騎士と闘技場 5 の続きです。
ここからはサガア兄さんメインなので番外編扱いです。

闘技場の中心ではいよいよ協闘大会の決勝が行われていた。

観客達が固唾をのんで見守る中心で一者は闘う。殺し合つたためでも、損ない合うためでもなく、各自の実力を比べあつかのようなそれにサヴァは久方ぶりの感覚を覚えた。お互いの技を手加減する事無くぶつけ合い、避ける事も逃げる事もしない。一撃一撃に気力がみなぎっている。

「楽しんでいるな。顔が見えなくてもわかる。俺も最高に楽しい」紅濫将軍がそう言い、身体に対して小さい剣を振る。素早い踏み込みに対してサヴァは槍の柄で応じ、将軍の大きな身体に合わないその剣は一撃打ち合うだけで持ち手から折れた。「俺の剣が！」闘技場の入場門の方から男の悲痛な叫び声があがる。

「良い槍だな」

使い物にならなくなつた剣を捨て、紅濫将軍は紅の髪を振り乱しながら数歩引くと、口元に笑みを浮かべて言つ。

「紅濫将軍！ お待たせしました」

「おおよー！」

入場門から先ほどとは別の赤麗の軍服を来た男が叫び、長い柄がついた斧を投げ入れる。それを拾い上げた将軍が振り上げると深紅の刃が太陽光を受けぎらりと輝いた。柄の長さはサヴァの槍ほどもありそつだつた。遠目から見ただけでも細かな装飾があり、実戦用よりも儀礼用のものに思われた。

「場内だとコイツに仕込まれた術は封じられちまうが、一応手持ちの武器では一番頑丈だ」

そう言つて振りかぶつて来た斧を槍で受けると、今までの物とは比べ物にならないくらい重い衝撃がきた。さすがのくろやみ国の槍も震動で震え、サヴァアは柄を強く握り直した。

「急ぎ用意させたがまあマシだな、本当はもつと俺に馴染んだ物で相手したかつたんだが」

将軍は話しながら感触を確かめるように軽い動きで振り下ろす。受け止めるサヴァアは衝撃に耐えるが、受けた刃を押し返す余裕は無い。

「……」「ぐる前にせたら強い銀髪とやりあつちまつて俺の得物のいくつかはぶつ壊れちまた。お前アイツらの事知らないか？ 微妙に似た気配を感じるんだが」

「……」

「

」

サヴァアは何も聞か無かつた事にして、無言のままに構え直した。

「エシル、先ほど竜槍などのような話をしたのですか？」

大空騎士団團長のエシルは傍らに立つコリアを見た。彼女は決勝が始まつてから闘技場の様子から目を離す事が無い。

「気になりますか？」

きつく握り込まれた彼女の手を見て深い青紫色の瞳を細めると、エシルは先ほどの様子を彼女に語り出した。

飲み物を買うために廊下を歩いていたエシルは、出場者控え室に戻ろうとする“くろの騎士”を見かけると迷う事無く近寄り、

「青嶺国を旅だつて行方不明と聞いていたが、無事だつたか」

そういきなり声をかけた。相手が行方不明者だろうが正体を隠していようが気にせず、ユリアが気にしている男に対し、迷いも遠慮もなく話しかける。相手の顔は黒い兜で覆われて表情は見えないが、拒絶する事無く答えてきた。

「ああ。あの時の事には感謝している。あなた達のお陰でもめる事無く旅立つ事ができた」

周囲に人がいて、かつ聞き耳をたてられている事を感じたので、二人はどうちらとも無く連れ立つてひと氣の少ない場所へと移動した。「今までどこに？」

エシルが知つてているのは彼が青嶺国へ妹と共に亡命したところまで。大空騎士団としてはその後の支援もしていたが、彼自身は緑閑国で起きた問題の処理にた携わっていたため、気がつけばかつて緑閑国騎士団が誇っていた竜槍と呼ばれた騎士は行方不明になつていた。

「妹を治療出来る国があると聞き旅に出て、今もそこで」「緑閑国の騎士職を捨て、大空騎士団からの誘いも蹴つてか。騎士の誇りよりも妹が大事という訳か」

「ああ」

“くろの騎士”はしつかりとうなずいた。

「騎士の資格はこの世でたつた一人になつてまで守るものではない」「わりきつてるな」

多くの騎士は騎士である己に誇りを持ち、それを軸として生きている者も多い。だがエシルは彼の言葉に同意を覚えた。自身においても、全てを差し置いてでも守り通したいものは別にある。「だがなぜまた騎士になった？ しかもそんな格好で」

「守りたいものができたからだ。それを守るために俺のこの身体が役に立つのなら、いくらでも使う。この鎧はその為のものだ」

ジエスルが運営室に戻ると、団長のエシルが試合を見ながら各部署からの報告を聞いている最中だった。

「現在街の周囲がまた別の結界で囮まれているようです」

「一人の衛士の報告に対しても、エシルは一人納得するようになづく。

「ヴィルヘルムスの仕掛けを彼の部下が発動させたようだね。元々この闘技場の結界 자체彼が作ってくれたものだし、例の探しものの関係だろう。外の事だからあまり気にしなくていい。今の我々は全力をあげて闘技場内の秩序を守る事が重要だ」

その様子を眺めていたジエスルは、ふと違和感に気付いた。いつも彼の傍らに立つ存在がない。

「おい、副団長はどうした」

「ちょっとでかけていますよ」

振りかえったエシルの浮かべる笑みは陽光のように輝くものだった。その「外向け」の笑みに、ジエスルは軽く恐怖を覚えた。

「おい、何があつたんだ。もしかしてでかけたつてのは“くろの騎士”の元へか

「ええ」

「副団長が男を気にして動くのをあえて許すのか?」

「断腸の思いですよ。軽く内臓が煮えくり返っています。ですがこればかりは仕方ありません。彼女のたつてのお願いですから」
そう言ってさらに微笑むエシルに、ジエスルは鳥肌をたてた。

「まさか『湖畔の剣人』を出したのか?」

紅濫將軍の乱雑な深紅の髪は赤麗国軍の不思議の一いつされている。田元がすっかり隠れているのに鬪いに支障を感じている様子はないし、あれで視力も良いと聞く。どの様な理由でああいつた髪なのか、サヴァには想像もつかない。だがあれで相手に目線から次の動きを読まれないようにしているのかもしれない。そういう事を考えていると、鎧の通信装置が立ち上がる音が聴こえた。

『こちらからひみ国内に戻りました。そちらもいつでも撤収してください』

通信装置から聴こえて来た闇の精靈からの声に、サヴァの意識はくろやみ國の国民に戻った。その変化に紅濫將軍はめざとく反応した。深紅の髪の隙間から覗く田元からは笑みが消える。

「そろそろ勝敗をつけるか！　“くろの騎士”よ

「ああ」

その瞬間、“くろの騎士”は將軍からの斧の一撃を右肩と右腕全体で受け止め、衝撃を下半身のバネを使って受け流し、同時に將軍の足へ向け槍を投げて突き差す。將軍が槍を避ける隙にサヴァは斧を抱き込んだまま体を大きく倒して足を上方へ伸ばすと、將軍の首元を足で捕らえてそのまま地面へありつたけの力で叩き付けた。國、とりわけ軍に所属する者は定められた武器を使った戦い方が身体に染み付いている。そのため、武器を手放して全身を使う鬪い方や、足技などにはとつさに対応出来ない。

サヴァはそれをくろやみ國で凶暴で元軍属の影靈達から身を持つて教わった。

「あー楽しんだ。これだけ純粹に樂しいのはどれだけぶりか

紅濫將軍は氣絶はしなかつたが起き上がる事なく、ひびの入った地面に寝転んだまま言つ。

見逃してくれるつもりらしい。

「おい、竜槍。次にどこかで会うときはもう國の騎士同士だらう。

殺し合ひう事にもなるかもしけんが、また会ひ口を楽しみにさせちらつ。気合いを入れて帰れ」

「感謝する」

サヴァアは将軍の足元から槍を抜くと審判達や衛士の声を無視して観客席に飛び込んだ。闘技場には天井がなく青空が見えていたが、法術による結界が張り巡らされていることは聞かされていた上に、鎧を着ているせいなのか、空を覆う金色の糸のようなものが薄く見えた。

「出口には行かないのか！　どこに行こうっていうんだ」

紅濫將軍を打ち倒した後、“くろの騎士”が速攻で観客席に飛び込むのを見て、ジョスルは待機させていた衛士と共に追つた。走りながらようやく指示を出せるようになつた大空騎士団員にも声をかけて集めて行く。

熱狂する観客をすり抜け、飛び越え、“くろの騎士”は最上部へ駆け上がる。

観客席が途絶え、場壁にあたると一瞬空を眺め、それから壁を蹴つて飛び上がる。

そして空中の「なにか」を両の腕に絡め、掴むような仕草をすると、その手を後方へ振り抜いた。空気が振動し、一瞬空の色が白く染まる。

「あ、あいつ、結界を素手ではぎ取りやがった！－！」
ジョスルはあまりの出来事に思わず叫んだ。

“くろの騎士”が鋭い口笛のような音を発すると、黒い影が闘技場上空に飛び込み、落下中の“くろの騎士”へと勢いよく向かう。

「おお、竜か

上体だけ起き上がった紅濫將軍がそれを見上げ、言ひ。

黒い身体の竜は“くろの騎士”を受け止めると、一気に羽ばたいて街の外へと向かつて高速で飛んで行つた。

「竜つて…まじかよ！　どこにいたんだよ！　あーとにかく！　追

うぞ！　街の包囲隊、黒い竜が行くから追え！」

ジエスルは半分やけになりながら通信術の仕掛けられた腕輪に向

かつて指示を出した。

「べの騎士の脱出劇・決勝・（第三章「べの騎士と闘技場 5」の続）（後

べの騎士の脱出劇・湖畔の剣人・へと続きます。

べの騎士の脱出劇・湖畔の剣人・（・決勝・の続き）（前書き）

第三章　べの騎士と闘技場　5　の続きの
べの騎士の脱出劇・決勝・
の続きです。

への騎士の脱出劇・湖畔の剣人・（・決勝・の続）

「エシル、お願いがあるのですが」

揺れる視線と共にぎこちなく言葉を紡ぐコリアに対し、エシルはいつも彼女に対してもう一つにひとつこりと微笑む。

「君のお願いなら何でも叶えるよ、コリア」

「『湖畔』を出してくれませんか」

黒い姿のゲオルギに乗り、サヴァアが闘技場から目一杯の速さで飛んでいると、街外れの草原にさしかかったあたりで結界に阻まれた。先程の闘技場にあつた糸のような結界とは違い、ぼんやりと光る水の薄い膜のようなもので、力づくでなんとかできそうなものではなかつた。仕方がないので一旦地上に降り立つ。

『このまま一気に逃げないの？』と不思議そうにゲオルギが首を傾げる。

「どうも俺たちを見逃してくれなにようなんだな」

そう言つてゲオルギの首筋をなで労ると、草原に立つ人物の方を向く。

そこに佇むのは大空騎士団の上着を肩に羽織つた女性だった。

「お待ちしておりました」

銀縁の眼鏡をかけ、肩を越える長さの縁と青の中間の色の髪を風に遊ばせながら微笑む。だがその優しげにもとれる笑みとは裏腹に、まとう雰囲気は薄い氷が張つたように緊張したもので、異様な取り合わせに相手の意図が読めなかつた。そして女性の手に持つものを見て、サヴァアは鎧の背に装着していた槍を手に持つた。

(“刀”か…)

騎士の剣はたいていは拳の幅ほどのみすぐなものが多いが、この刀という種類の武器は、片刃で二寸用のようにゆつたりと反った形状をしており、細身にもかかわらず恐ろしいほどの強度と切り裂く力がある。そして製造が難しいこともあり、大陸ではめつたに遭遇することのないものだつた。

サヴァアはかつて育つた地方で馴染みのあつたそれを思い出し、ゲオルギをかばうように前に出て槍を構えた。鎧の探知機能では周囲五？圏内に目の前の女性の他には誰もいないようだつた。

「この一帯は頼んで人払いをしてもらつています」

女性はそう言うと眼鏡を外して肩にかけていた上着の右胸のポケットに入ると、それらを草原の上に放り投げ、淡い水色のブラウスと制服のパンツだけになる。

そして右手に持つた刀の鞘から涼し気な光を放つ細身の刀身を抜き出すと、そのまま踏み込んで斬りかかってきた。

「なつ…」

想像していた以上の速さで来られて、サヴァアは思わず槍と左腕で防御した。

「お相手願います。私と勝負して逃走できたならこの先の動向には目を瞑りましょう」

彼女の表情は恍惚としており、青白かった頬には色があり、澄ん

だ湖のように透明感のある水色の瞳はとろりとうるんでいる。

「さあ、闘いましょう、竜槍のサヴァ。私は貴方にずっと憧れていますよ」

大空騎士団団長のエシルは約束した人払いの範囲のぎりぎり外にあたる見晴らしの良い丘の上に立ち、“遠視”^{えんし}の術で二人の闘いを眺めていた。草原を駆け抜ける風がきつちりと整えられていた彼の淡い紫色の髪を柔らかくほぐし、普段以上に感情の見えない顔に陰影をつけていた。

大会の終結とともに大空騎士団のうち各国所属部隊の指揮権はジエスル王子などそれぞれの部隊長の元に戻っていたのだが、エシルは先ほど大会の後片付けという名のもとに、強制的に大空騎士と衛士全員を団長の指揮下に置き、コリアが闘いに集中できるように務めていた。

あえて間違った方向に人員を散開させるが規律上は何の問題もない。ジエスル王子が文句を言う以外は。

「おまえらはまともに仕事する気あるのか！」

「仕事はしていますよ。しかし仕事以上に騎士として生きているのです。特にユリアは」

エシルはジエスルに返事をしつつも、深みのある紫の瞳は微動だにせず草原の様子を“視”続ける。

彼はユリアの持つ氷のような刃がきらめくたびに胸の内が疼くのを感じ、それを間近で見ているであろうサヴァに対しての嫉妬を感じ、そして自分の心から沸き起こつてくるそれら二つの感情を味わ

つていた。

「普段はあんなに大人しいのにな。副団長がああいう人物だと知っている奴なんて騎士団にもほとんどいないだろ」

「ええ。ユリアは奥ゆかしい人ですから、すすんで公言するつもりはないようです」

かつて顔を真赤にして黙つていてと言われたときのコリアの様子を思い出し、エシルは顔をほころばせた。

「ここだけの話ですが、私は彼女のそばにいるために騎士になりましたよ」

「見て薄々わかつていたが、マジか。そんな動機でよく団長まで登りつめたな」

“くろの騎士”捕獲を諦めたのか、ジエスルは待機している法術師に追跡と探査の構築を指示すると、近くにあつた岩に腰掛けて白箔王の依頼に対する報告書の作成に入つていた。

「ジエスルは“視”ないのですか？」

「おまえに殺されたくないから、副団長の素顔は見たくない」

「確かに剣を持っている彼女はとても美しく、あの姿を他の男が見るなどと」

ジエスルは今回の件で“くろの騎士”が確実にエシルの死の芳名帳に載つたことを知つた。

先程の紅濫将軍との闘いとは比べものにならないくらい、サヴァは苦戦していた。

くろやみ国でマルハレータと模擬戦をした時もそうだったが、サヴァは自分がどうにも女性と闘うことが苦手だと実感していた。

病弱な妹と一緒に暮らしてきて、病で寝込み、倒れ、転び、怪我をする姿にいつも心配させられて来たせいか、女性の身体の弱さに恐怖すら覚えている。

それに対して、くろやみ国でマルハレータは意識を変えろと言い、何度も暴力的に殴りかかってきたが、苦手意識を乗り越える前にローデヴェイクが現れ、マルハレータがサヴァと模擬戦をしようとする度にローデヴェイクが本気で殴りかかってきて結局それどころではなくなってしまった。

その苦手意識の上に、今闘っている女性はかなりの剣の使い手で、高速で鋭く斬り込んでくる。何度か読み誤って剣戟を受けたが、そのたびに鎧に亀裂が増えていく。腕もそうだが、扱う刀も恐ろしく切れ味が良い。

「撃ち返してください。そうしないと、この『湖畔』の障壁は破壊できませんよ」

微笑みを崩さないまま、女性は言つ。

「『湖畔』…まさか『湖畔の剣人』か？」
『紅濫の烈士』、『紫塔の騎士』、『湖畔の剣人』は大陸の騎士なら一度は耳にしたことがある剣の使い手達だ。他にも数名いるがよく名が挙がる三名をまとめていつしか三剣勇と呼ぶようになつた。前者二名は顔も本名も有名だが、『湖畔の剣人』は人前にほとんど出てこず、山奥で修行している剣士のことだと言われていたが…

「剣でしたらそうなりますね。ですがそこに槍も含まれるのでしたら貴方だつて有名なのですよ？『緑闇の竜槍』」

サヴァは下から斬り上げてきた一撃を槍で受け、一瞬の溜めを入れると一気に振り払う。

「あれは俺をからかう名前だつたんだがな」

竜のような外見で竜に乗り、剣が苦手な槍しか取り柄のない騎士。それがいつしか通り名になり国外にも通じるものになつていった。緑闇国でのサヴァは騎士仲間からは認められていたが、騎士団の

上層部からも一般市民からもあまり好意的には見られていなかつた。故郷が滅んで妹以外の身寄りが存在しない上に、竜肌のような模様と左目という奇異な外見。

実力主義の騎士団の中ではそれなりの地位にいられたが、常に周りに認められるために過酷な仕事を多く引き受け、家に帰る事も少なくいつも妹に寂しい思いをさせていた。拳句の果てに妹が攫われてもすぐに動くことが出来なかつた。

「俺は俺だ。もう緑闇國の人間ではないし、そのうちまた別の名前がつくだろう」

「今度は別の国のか騎士として？」

『湖畔の剣人』はサヴァの槍を刀の背の部分で受けけると顔を寄せ、鎧の奥、黒い仮面の下のサヴァと視線を交わしながらささやいた。

「貴方はこれからも戦うのですか？」

サヴァは彼女の瞳から目を逸らすことなく答える。

「ああ。俺は戦う。守るもののが無い」

自分を受け入れ、妹のライナの命を救い、追放されたシメオンを受け入れ、竜のゲオルギと共に静かに暮らす事が許される国を。

「そうですか。では次に会う時は…」

『湖畔の剣人』は寂しそうに顔を曇らせ、力をゆるめて刀を引く。

「女性への耐性をあげておいてください！」

そして再び刀に一気に殺氣をこめて斬り込み、サヴァが避けたところをまた畳みかけて斬りかかってくる。

「こんな状態だとまともに闘えないじゃないですか！ 守るものも守れませんよ、サヴァ！」

「あ、ああ」

いきなりの勢いに圧倒されて、数撃受けて、もう本当に鎧の耐久具合が危なくなってきたのでサヴァは逃げに転じた。

刀に追われながら周囲を探ると、行く手を阻まれた水の薄い膜のような結界は消えて、騎士と衛士の集団に遠巻きに包囲されつつあ

つた。

「ゲオルギが様子に気付いて駆け足で近づいて来たといひ飛び乗ると、一気に飛び上がらせる。

「じ、助言に感謝する。それでは…」

「感謝じゃなくて、もひとつ強くなつてください」と言つていのものです

！」

遠ざかる中で『湖畔の剣人』からの叫びが聞こえてきた。

「つ、疲れた…」

ゲオルギの背の上でがっくりと頭を垂れ、サヴァは思わずそうつぶやく。また女性への苦手意識が強くなつた気がした。

ちなみにこの一件のおかげで後にエシルに本氣の殺意で突つかかられる事になると、この時のサヴァはまったく予想していなかつた。

への騎士の脱出劇・湖畔の剣人・（・決勝・の続）（後書き）

兄さんの女難

「くろやみ国と準備　一」　でぐつたつして、いたのせいかつた事が
あつたからなのです。

ある少年の物語（前書き）

第一章「無いものと有るもの 4」 読了推奨
(さらに第三章のくろの騎士シリーズまで読了していると登場人物
が分かりやすいです)

本編の中ではすでに終わっていた、シメオン少年が登場するまでに
至った諸々の騒動の話です。

通常の一話分くらいの長さがあります。

ファムさんも精霊もほぼ関わってこないのでわりとシリアルズです。
でも第一章や第三章や出てきた人物も少しだけでてきます。
要するに、本編の補足的なものです。

僕がライナが行方不明だと知ったのは彼女がいなくなつてから三日も経つてからだつた。いつものように寄宿校からライナとサヴァ兄ちゃんの住む家に行こうとしたら、先生に引き止められて、教えられた。

「どうして黙つていたんですか？」

「言えればこつして探しに行こうとするからだ。今は騎士団にいるあの子の兄が探している」

「サヴァ兄ちゃんはいつも騎士団の仕事が忙しくて中々家に帰れないはずです。なのに動いてるつてことはライナが本当に危ないからじやないんですか？」

僕は縄で縛られて教員室に転がされながら、先生を見上げた。

「大丈夫だ。彼女はきっと見つかる。だから君は学院に入ることに集中するんだ。いいね。しばらくそこで自分を落ち着けなさい」

先生はそう言つと僕を残して教員室の鍵を閉め、どこかへ行つてしまつた。

僕は目を閉じて深呼吸をする。

震えそうになる身体を出来る限り落ち着かせて、薄級の精靈を呼び出し“探知”と“遠耳”の精靈術を発動させる。

校舎内で教師が集まつている部屋を探した。さらに集中して、耳をすませると、声が聞こえてきた。

「おお、戻ってきたか。どうだつたシメオン君は」

「あの子があんなに錯乱するなんて初めてだ。いやはや、一晩で落ち着いてくれるといいんだが」

「あの青嶺国の学院に入れそうな一番の有望株だからな。このまま頑張つてもらいたいものだ」

「いなくなつたのはあの変な病を抱えた子でしょう？　きっと例の団体に目をつけられたんじゃない？　可愛そうにねえ」

「どうも兄も行方不明になつちまつたらしいぞ」

「あの騎士の兄さんがか。仲の良い兄妹だつたんだがなあ。うちの生徒はまだ被害がでないんだろう？　早く騎士団が捕まえてくれると願うしか無いな」

もう役に立ちそうな情報はないな。

精霊術を切ると繩をほどいて扉の施錠の法術を解いて出た。そのままサヴァ兄ちゃんが働いている騎士団駐在所に向かう。何人か知っている顔の騎士の人たちがいて、その中心につづくまるようにして座るサヴァ兄ちゃんがいた。

「兄ちゃん！！」

いつもは厚着をして肌を隠しているのに、薄着で、土と傷だらけになつていた。

そして、その腕の中には塵まみれの毛布にくるまれたライナがいた。

「ライナ！」

人ごみをかき分けて必死に触れた。ライナの力なく垂れた手は水のように冷たかった。

「シメオンか。学校はどうした」

「もう放課後だよ！　ライナと兄ちゃんが行方不明つてきいて來たんだ」

「大丈夫だ。無事だ」

ライナの顔は青白い。意識もない。

「ライナはどうしたの？　ねえサヴァ兄ちゃん、ライナはどうして起きないの！」

「落ち着けシメオン。ライナには治療が必要だ。俺達はこれから青

嶺国へ行く。あちらの方が医療も進んでいるから絶対に治る。だからおまえは勉強に集中するんだ。いいな

僕は返事をしたのだろうか。めったに見ない兄ちゃんの必死な顔つきと、田を見まさないライナの姿が頭の中でぐるぐるまわって、気がついたら兄ちゃんたちはいなくなっていた。

「竜槍め、潜入作戦とは危険なことをする。あとでうちが睨まれたらどうするんだ」

「あそこに関してはもう国も放置状態だからな

ぱうっとしていたらふと冷たかつたライナの手を思い出して、震えが止まらなくなってきた。しばらく経つて落ち着いてきて兄ちゃんたちを追おうとしたら、騎士団の人たちに止められた。

「先ほど国全土に緊急警報がでた。しばらく国外に出ること禁止だ」

ライナを助けるために兄ちゃんと仲間の騎士達が秘密組織に潜入して、犯罪の証拠を見つけることができた。けど上からの圧力がかかつて逮捕できないので、騎士団はしかたなく国境を封鎖することで逃げ道を塞ぐ手段に出たらしい。兄ちゃんの同僚の騎士の人がそう教えてくれた。

サヴァア兄ちゃんはそのまま直前に検問を突破して、最後は騎竜のゲオルギに乗つて強引に国境を越えたらしい。

「あいつは剣を返したらしく。あれだけの腕があつたつてのに、惜しいな」

騎士が剣を返す。つまりは騎士を辞めるということ。

「青嶺国の大空騎士団の知り合いを頼つたらしいから、悪いことにはならないだろ。お前も学校へ戻れ」

騎士の人に促されて戻ろうとしたけれど、学校の門のあたりから進めなくなってしまった。

地面も街も空もなにもかもがぐしゃぐしゃで、何が何だかわから

ない。

気がつくと僕は学校の医務室に運ばれていた。倒れていたのを発見されて運び込まれたらしい。

寝台に寝かされて、眠れないので起き上がる事もできない。

することがなくて、僕は眼を閉じてライナのことを考える。

ライナが居なくなる前、最後に会った時にした会話はなんだっか。確か僕はまた小言を言われていたんだつけ。

「シメオン！ 大丈夫なの？ また勉強に夢中でご飯食べてないでしょ。今度忘れたら十日間ピーマンだからね。前みたいにゲオルギの所に持つて行つたら、三倍の量なんだからね！」

君の方が大丈夫じゃないじゃないか。

また体調を崩しているのに、僕の事心配してばかりで！

「兄さんは丈夫だから放つておいても平氣だけど、シメオンは心配になるから」

君の身体、治療法が無いんだよ？

「あと夜食用にマフィン沢山作つたから、持つて帰つて寄宿学校で食べてね」

彼女はいつも僕の心配ばかりしていた。

僕は孤児だ。

気がつけばライナとサヴァ兄ちゃんと同じ村にいて、孤児院で暮らしていた。その頃から身体の弱かつたライナと年の近い仲間がいなかつた僕は他に遊び相手を見つけられなくて、いつも一緒に遊んでいた。

村が襲われた時も一緒だつた。

孤児院の先生も仲間たちもライナの家族も、間に合わなくて結局

誰も助けられなかつたけれど、僕はライナを守ることができた。

そしてライナは僕を守ってくれた。最後まで、僕が血まみれになつてもライナはずつと一緒にしてくれた。

村を逃げ出したあとは森の奥の洞窟にずつと一人で隠れていた。サヴァー兄ちゃんが騎士団の人と助けに来てくれるまで、ずつと。

サヴァー兄ちゃんはライナと一緒に僕も引きとつてくれた。

兄ちゃんが村に帰省するたびに会つていたし、僕が兄ちゃんを恐れないと知つてよく遊んでくれたから、家族のように思つてくれたのかもしぬないし、僕がライナから離れなかつたのもあるかもしない。

村での体験のショックでライナは言葉を話せなくなつて、僕は体の感覚と感情を忘れてしまつた。

ライナは毎日暗い顔をしていたし、僕は僕ですつとふわふわとした霧の中で生活しているようだつた。苦しくはなかつたけど、何も感じない不安はあつた。けれど、喜怒哀楽を忘れてしまつても、僕はライナの傍にいる事には変わりなかつた。

サヴァー兄ちゃんの家のある街に住むようになつて半年ほどたつて、少しづつ言葉を使えるようになつたライナが僕に言つた。

「あのね、シメオング、いつも手を繋いで安心させてくれるから、私、また言葉使えるように、なつたんだよ。だから、私がシメオングの心が元気になるまで、ずっと傍にいるから。大丈夫なんだから僕が初めて取り戻したのは、繫いでいたライナの手の柔らかさだつた。

ライナの体調は年々酷くなつていつた。彼女の身体が消えかける奇病は誰もが原因がわからないといい、どの医者に見せても諦めら

れてしまった。

僕は時々寝込むライナの看病をした。

ライナの消えかけた部分は麻痺したような感覚になるらしい。そして理由もわからず体が消えかけると言う不安と恐怖。時には痛みもあるらしい。

彼女はそれに黙つて耐える。唇をかみしめてベッドの上でじっとしている。身体の半分が透けているのを見られて窓の外から石を投げられた時も、欠けた部分を包帯で隠して外に出て奇異の目で見られた時も、ライナはじつと耐えていた。

サヴァア兄ちゃんは騎士団の仕事が忙しくて、月に数える程度しか家に帰つてこない。騎士団の中でも特に危ない仕事が多い部署にいるらしい。

それでもサヴァア兄ちゃんが家にいるとライナは安心して、とても喜ぶ。兄ちゃんもライナが寝込んでいるときはなるべく家に帰つてくれるし、ずっと傍にいる。

あの一人の間に僕が入ることは出来ないけれど、一人は僕を受け入れてくれているから、それで満足だった。兄ちゃんがいないと、ライナの笑顔は時々どこか無理をしたものになるから。

ライナを元気づけたくて、もつと笑顔になつて欲しくて、僕は必死になつて笑顔を思い出した。僕が笑うことでライナが笑ってくれて、そして僕は嬉しいという気持ちを取り戻し、涙を流すライナのために怒りと悲しみの気持ちを持てるようになつた。

僕はライナの傍でしか泣かなくなつた。

どんな目にあつて何を言われても、嬉しくても悲しくても悔しくても、ライナの傍以外では決して涙は出でこない。どうしてだかは気にならない。ライナの隣にいられるのなら、僕はそれでいい。

ライナは髪を褒めると一番喜んでくれる。

「私この綺麗な髪があるから身体のこと言われても平氣。父さんと母さんが褒めてくれた自慢の髪だから」

ライナの自慢は髪だった。腰まである長い髪は綺麗な緑色をしていて、いつもは濃い緑なのに日の光でみるとちょっと黄色がかつて見えたり、月の光だと薄青くかがやいて見えたりする。不思議な色の髪。

彼女の強がりなのかもしれない、僕を安心させるための方便かもしれない。

でもライナは毎日髪を大切に手入れしていた。

体調が悪くて起き上がれない時は僕が手入れをしている。最初は断られたけど、何度も頼んだら触らせてくれるようになった。僕が櫛ですくと、ときどきくすぐったそうに笑うんだ。

街の女の子がしている三つ編みを頭に巻き付ける髪型をしたあげた時は、何度も鏡を見て、照れくさそうに笑ってくれた。ライナにはいつも笑って欲しい。

でもライナの体の病気は年々酷くなつて、笑顔も減つていった。

僕は試験を受けて街の学校に通うよつになつた。

勉強は面白くつて、夢中になつていたら国一番の寄宿学校に通えるようになった。学費も援助金が出た。そこでたくさんの事を知つて、僕には目標ができた。そのためなら三人で一緒に暮らすことができなくなつて、三日に一度しかライナに逢えなくなつても我慢できた。

ライナの体を元気にしたい。

隣国の青嶺国の王立学院にいけば、そういう事を研究できると大人たちが言つていた。そして頑張れば、僕はそこに行けるかもしないと。

「そのまま順調にいけば、なんの問題もなかつた。

「おいシメオン、学校はどうした」

「抜けてきました」

「お前な。青嶺の学院入試はそろそろなんだろ？ あそこに行けば身分は保障されるし、身寄りのないお前でもいい仕事に就けるんだぞ」

「ライナがどうなったのか心配なんです」

兄ちゃんの友達の騎士の人はため息をついて、暗い顔で僕を見た。「仕方ない。口止めされていたんだが…教えよう。彼女はもう助からないらしい」

ここで気を失っては駄目だ。指に力を入れて、手のひらの肉に爪を食い込ませて意識を保たせる。

「…そう言えば僕が大人しくなると？」

「違うんだ。サヴァアから手紙が来たんだが、攫われていた間にかなり病状が悪化したらしい。青嶺国でもいまだに治療が見つからないそうだ。サヴァアは諦めないつもりらしいが、正直、もう治療法が発見されても間に合うかどうか分からない状況らしい。周りはもうダメだと思っているよ」

世界から音が消えたように感じた。

何がライナを連れて行こうとしている？

目の前の人間たち？

攫つた組織？

「いいがシメオン、これは事実だ。受け止める。そして自分の未来に集中するんだ」

ライナがいない未来ってなんだ？ そこにいつたい何の喜びがあるんだ？

僕は走った。

がむしゃらに走りに走つて、いつの間にか見慣れない路地裏にたどりついて、思い出したように荒い呼吸をしていると、物影で緑色の外套を着た集団が女の子を捕まえて袋につめているのを見た。

気がついた時にはそいつらを叩きのめしていた。

それからそいつらの脳を法術で覗いて組織の施設の情報を聞き出すと、片っ端から潰していくつた。潰した先からまた別の施設の情報が出てきたので、それも潰し、連鎖的にいろんな部署を探し出して潰しては情報を得て、また次の部署を潰していくつた。

簡単だった。単純作業のくりかえしだ。気に食わなければ徹底的に破壊したし、めんどうさくなればそのまま最寄りの騎士団の駐屯地に放り込んだ。以前本で読んで知った、周囲の気脈や自分の命脈を体力や筋力にかえる方法を使って、ほとんど休むことなく動きまわれた。

ライナを捕まえていた奴らもみつけた。なんだかしらない研究の、意味もわからない実験記録も見つけた。

見た瞬間、破壊した。何もかも。

僕からライナをうばうものは全て消す。

『消して消して、消してもライナは戻つてこないんだぞ』
『そうひきかける僕と

『なら全てを消してしまえばいい』
と、暴れまわる僕がいた。

ライナがいないと、僕は世界を感じられなくなる。それは純粹な

恐怖だった。足元に穴があいて、いつ自分がそこに落ちてしまうかわからない。落ちればきっと一度と戻る事はない。だけどその時は戻れなくなつても構わないと思っていた。

ライナがいないのなら、何もかもに意味はない。

あらかた組織を潰しまわつて、ついでに邪魔だった貴族とかの癒着も、国家間の裏の関係も、全部引っ張り出せるだけ引きずりだして、やることがなくなると、すべてがどうでもよくなつてしまつて、青嶺国から来た派遣部隊に投降した。

僕は危険人物として拘束され、そして牢に入つてようやく国の状態を知つた。

その頃には追い詰められた秘密組織がなりふり構わず表立つて活動していて、国の騎士団が他国と協力してそれを鎮圧するために正面衝突をしていて、さらにその中で僕が好き勝手に暴れたから、収集がつかない状態になつていたらしい。

僕は取り調べを受ける中で人間じゃないとか、生きた災厄だとか色々言われたけれど、もう色々どうでも良かつた。けれど、そこで青嶺国に行つたサヴァア兄ちゃんが、ライナを助けるために海の向こうへ旅立つていたことを知つた。

部隊の中にいた紺色の髪の騎士が教えてくれた。

「あの男からの伝言だ『心配するな』だとよ、坊主」

サヴァア兄ちゃんはいつも言葉が足りないんだ。情報が足りなくて何をどう心配したら良いかわからないんだよ。

なによりライナがどんな状態なのか分からんなんて、心配するしかないじゃないか。もしかしたら今もどこかで苦しんでじつと耐えているかもしれない。そう思つと落ち着かなくなつて、僕はまた暴れた。

牢の中で暴れていたら、部隊を率いてきた青嶺国の王子と一緒にいた、白金色の髪を持つ凄腕の法術師がどうしてだか牢にやつきて根気よく話を聴いてくれた。

なんでも法術師にはずつと探している人がいて、緑闇国の秘密組織にいるかもしれないから調べにきたのだといつ。結局その探している人は見つけられなかつたらしいけど、力を貸してくれて、処刑される寸前だつた僕を国外追放措置にして、生き延びさせてくれた。そしてどこからともなく一匹で帰つて来たゲオルギを登録抹消扱いにしてくれて、僕につけてくれるより緑闇国に働きかけてくれたのも彼と青嶺国の王子だつた。

「あいつがここまで赤の他人に気を配るのは珍しい。お前に似たものを感じて同情したのかもな」

青嶺国の王子はそう言つていた。

あとでその法術師は白箔国の王だと教えてもらつた。王様だけど、忙しい仕事の合間をぬつてわざわざ、といふか無理やり緑闇国まで来たらしい。

彼は別れ際に指の先くらいの小さな金色の石いろのようなものを渡して來た。発動した場所を記録して、あらがじめ設定した場所まで飛んで行くという、簡単だけれどかなり精密なつくりをした人工精靈だ。

「これを持つて行つてください。そしてもし、くろやみ国、もしくは闇の国にたどり着いたら空へ放りなげてください。それで発動します

「お前まだ例の国の事諦めてなかつたのか」

彼の隣に立つていた青嶺国の王子が驚いたよつと言つた。

「たどれる手は何でも使いますから」

彼の目は兄ちゃんの目に似て力強かつた。

「いいよ。もしたどり着けたとして、詳しく述べなくていいの？」

それくらいの恩がえしをしたいくらい、この人達には助けられた。

「ええ。あとは自分でやります。あのを失ったのは私の責任ですかから」

そう言つて彼は水平線の向こうを見た。

「会えると良いね」

「君も」

ゲオルギの好きなように海の上を飛んでいると、案の定兄ちゃん達のところにたどり着くことができた。思つたとおりだつた。だつてゲオルギは元気いっぽいで、とても楽しそうにまっすぐひとつの方向をみて飛んでいたんだもの。

荒野しか無い島の、荒れ果てた港を手指すと、元気なライナがいた。笑顔で駆けてくるライナが！

ライナが純白の羽根を生やして、満面の笑顔でいたので、僕は一瞬、自分がゲオルギから墜落して、気がつかないうちに死んでしまつたのではないかと思つた。でも僕の知らない人や、見たことない上級タイプの精霊もいたし、僕が国でやつたことを知つたサヴァ兄ちゃんに無茶をするなど怒られたので、現実だとわかつた。

ライナや兄ちゃんたちがいたのは、彼が言つていた国だつた。その女王さまはとても優しい人で、陽だまりのようにあつたかい人だつた。彼の探し人はもしかしたらと思つたけど、どうやらどちらにも事情がありそだし、ライナの恩がある国だから深くは探らないうことにした。

身体が元気になつても、ライナは傷だらけだつた。

純白の羽根は綺麗だし、小さな銀色の角は可愛い。ライナも気に入っていると言っていた。

でも彼女の長い髪はぱっさりとなくなつていた。あれだけ大事にしていました自慢の髪が。ライナはなんともなさそうな顔で邪魔だから切つたと言つたけど、僕は組織の研究資料庫で彼女の髪を見ていた。番号が書かれた麻紐でくくられて、無造作に棚の中に置かれていた。僕の知らない所できつと沢山泣いたに違いない。それがとてつもなく悔しかつた。

「確かにあそこで勝手に切られた時はとても悲しかつたけど、もういいの」

ライナの瞳は一瞬陰り、それからきらきらと輝きだした。

「シメオン、私この国で頑張つて生きてく。この身体、ファムさんに助けられたんだよ。見て、こんなに元気になつたんだから！」

そう言つてライナは僕の両手を握る。とてもあつたかくつて、力強い。

僕はずつと伝えられなかつた言葉を、顔が赤くなるのを感じながら意を決して言つた。

「ライナ、君がこの島国で暮らすなら、僕も一緒だ。僕、ライナが大好きだ。ずっと一緒にいよう」

離れ離れになつて思い知らされた。僕はライナのことが好きでたまらないんだ。

ライナは握つたままの手を握手するように振りながら答える。

「うん。私もシメオンの事大好きだよ。兄さん達と一緒にファムさまを支えていこうね

「ギュー」

僕達の横からゲオルギが顔を突つ込んで鼻先をライナになでつける。

「ぐすぐつたいよゲオルギ。もちろんゲオルギのことだつて大好き
！　ずっと一緒にだからね」

そう言ってライナは笑つてゲオルギの固い皮膚で覆われた顔をぐりぐりとなでた。こんなに明るく笑うライナは初めて見た。

…うん。

ずっと一緒にいて、もうちょっと大きくなつてから、分かつてもらおう。

今はこれで、十分に幸せだ。

ある少年の物語（後書き）

余談：紺色の髪の人は第三章の闘技場で兄さんと槍で闘つてた人です。実は顔見知りだつた。

余談2：裏のタイトルは「某王様が頑張ってる姿をチラ見せ」

銀色の精霊、商売する 前（前書き）

くろの騎士と闘技場シリーズを読み推奨。
本戦前日あたりの話。わりとぐだぐだ
ネタバレ以上に、読んでいる前提でないと分かりにくいかと思いま
す。

銀色の精靈、商売する 前

「え、物を売るにもお金が必要なんですか？」

黒髪の青年は灰色の瞳を見開いた。

「そりやあんちゃん、騎士さん達の大会があるから外の者も店せる
つちや出せるが、この街の中は場所も限られてんだ。それ相応の利
用料金つてもんが必要になるんだよ」

闘技場脇の広場を取り仕切つている組合の窓口で、中年の男が白
髪と茶色のあごひげを撫でながら言つ。

青年はあごひげを不思議そうに眺めていたが、肩に止まつた黒い
小鳥が黒髪を突つつくと、はつと何かに気付いたかのように姿勢を
正し、眉を寄せ困った表情を作る。

「困りましたね。じつは身内が大会に出場するので、その登録料で
手持ちの予算が尽きているんです」

「しかたねえもんはしかたねえよ。次がんばんな」

中年男性はそつなく言い、窓口から去つていつた。

「何も効果ありませんでしたね。さて、どうしましよう…サヴァアさ
んはまだ闘技場ですし…」

特に方法を思いつけず、とりあえず肩の小鳥に話しかけてみると
窓口の奥の机で書類作業をしていた女性がやつてきた。

「おにいさんおにいさん」

「？ ワタシのことでしょうか」

「そうよ、黒髪のかつこいいおにいさん。いいこと教えてあげる。
街の中で出店をやるのは有料だけど、大会中は大通りで食べ物を売
るんじゃないのなら登録もお金も要らないんだよ」

「そうなのですか！」

女性は笑顔になつた青年を見上げ、うつとりとした表情になる。「でも、何かと登録しといたほうがいいかもよ、さ、ここにお名前書いてちょうだい。あと連絡先もね」

「えーと」

女性にペンを渡され、紙を差し出され、困惑の青年をまたしても小鳥が突つぐ。突かれた方はゆっくりとペンを置いて花が咲き乱れるかのような笑顔になり、女性の手をとる。

「情報をありがとうございます。やさしいお嬢さん。今は急いでいますので登録は後ほどさせて頂きますね」

そう言って手を少し掲げるよつにして会釈をし、顔を赤くした女性を残し窓口からすばやく立ち去つた。

「さすがですね」

田立たない程度の速さで通りを歩きながら青年がそつ小声でささやくと、黒い小鳥は尾羽をぴんと伸ばし、胸を張つた。

青年は闘技場を中心に広がる街から出て人目がなくなると、一気に駆け足となつて郊外へと向かつた。畑や木立が広がる辺りで灰色に塗装された荷車の側に立つ竜と灰色のショールを羽織つた女性を発見する。黒い小鳥は青年の肩から飛び立つと竜の頭に飛び移つた。「待機」くわうさまです。大丈夫でしたか？

「はい。ゲオルギがしつかり守つてくださいましたの」

そう言い、ショールを羽織つた女性は竜の黒い身体を撫でる。竜は退屈だつたらしく、あぐびをして返事をした。

「サヴァさんはまだ戻つてきていないようですね」

青年が見回すと、周囲には人つ子一人おらず、動くものは穏やかな風が畠の麦の穂と木々の葉を揺らすだけだった。

「見てください。昆虫というものを捕まえてみました」

女性が少々弾んだ声で握つた手のひらを開くと、中から爪の先程度つやのある身体と、纖細な足を持つた虫があり、甲羅のような背中を開いて薄くきらめく羽根を開き、どこかへ飛んで行つた。

「飛んで行つてしましました。せつかくお土産にじょりと頬にましたのに」

そう言い、空に消えて行く虫を眺める表情は、同じ顔をした主とは随分違ひどこか生命の活力といつものが欠けたものだつた。

「彼らにも自由があるのですよ。説明も説得もなしに連れて行つては可哀想です。あの昆虫は寿命中程の雄でしたから、連れて行くのなら妻子も同伴したいところでしょう」

「ならそれ相応の待遇も用意せねばなりませんね。おうちも広い方がいいでしょう」「う

青年と女性が真面目な顔をして飛び去つた昆虫の家族について話しているのを、黒い小鳥と黒い竜は眠そうに眺めていた。

だいぶ日が陰り、辺りは薄暗くなつて來た。

「戻つてきませんね。何か問題が起きているのでしょうか」

木の上の細い枝の上にそつと立り、街を見つめながら青年は言つ。「そろそろあちらでは夕食の時間です。準備もありますし、ひとまずあなたは戻つてください。帰り道は大丈夫ですね？」

「はい。向こうではベウォルクトさんが迎えに来てくださるそうです。槍が出来たら持つきますわ」

そう言うとショールを羽織つていた女性はお辞儀をすると小さなウサギの姿になつて駆け出すると、かなりの速さで木立の向こうへ消えて行つた。

それからさらにも時間が経ち、すっかり日が暮れた頃になつて黒い鎧を身にまとつた戦士が現れた。

「遅かったですね」

「すまない。登録だけかと思つたら一般枠の予選も含まれていた」「駆け寄つてきた黒い竜が顔をこすりつけてくるのを撫でてあやしながら、鎧の戦士は言つ。

「鎧の調子はどうですか？」「

「まだ慣れないな。予選にのひとつに迷路競技があつたんだが、軽く走つたら勢いがつき過ぎて壁をぶち抜いてしまつた」

「そう言つてぶつけた場所らしき頭部をなでる。青年が見てみると、その箇所には傷ひとつついていなかつた。

「予選の結果はどうでしたか？」

「なんとか明日の本予選に進める事になつた。それと関係者用の身分証を貰つた。お前が入れるかどうかわからないが…」

「ワタシはやめておきましょう。ですが方法はありますので、当田 槍を届ける事はできるでしょう」

「そうか。市場の方はどうだつた」

「じつは少々予定外の事態になりまして…」

簡単に野営の準備をしながら青年が事情を話すと、鎧の戦士は何度かうなずき、そして案を持ち出した。

闘技場のある街は朝から賑やかだつた。

本日は一般枠と騎士達合同の本予選がある。実力者の騎士達は本戦から登場になるが、注目株は誰か、新人で有望なのは誰だ、本戦までいけそうなのは誰かなど話題には事欠かない。

この協闘大会を見る為に来た観光客と関係者で街は溢れかえつており、皆誰かと顔を会わせば大会予想について話し込み、さらに街の住人達も日頃の仕事をしつつも店先や仕事場で盛り上がつている。それは参加や応援のためにやってきている騎士達も例外ではなく、その中でも熱心な者は前日行われた一般枠の予選にも足を運んでおり、その中で起きた珍しい出来事を周囲に話していた。

「今年は予選で田立つ奴がいるらしいですね」

「ああ。市民枠で参加なのに全身鎧の奴がいてよ。すげえ変だつた」

「無駄に金かけた武装している田立ちたがりは毎回いるんじゃない
か。どこがどう変だつたんだ？」

「俺、受付会場でそいつ見たぞ。真っ黒でよ、剣とか持つてねえ奴
だろ。なんでか周りにいた傭兵達が怯えててよ、ただもんじやない
ぽかつたぜ」

「そうそうそいつさ。予選見てたらぶつ飛んでよ、迷路競技ん時
どうしたと思つ？ いきなり猛ダッシュしたかと思えば壁ぶち抜い
てそのまま「一ルしちまいやがつた」

「…それは失格にならないんですか？」

「あの迷路、組み立て式の壁だつたが一応金属とコンクリートで作
つたやつだぜ？ 今までそんな事した奴いねえから、結局合格判
定でてたぞ」

「障害物レースでもそんな感じだつたけな。飛び石を着地ついでに
踏み抜いたんで足場が崩れた周りが脱落していつたぜ」

「かなり凶暴で狡猾な奴ですね」

「面白そうな奴だ。本戦で闘えるといいな」

「そもそもお前が本戦いけるかが怪しいだろ、メールト。主力が法
術のくせに選抜に残りやがつて」「戦略を立てているからちゃんと勝ててているんだ。本戦ではお前に
も負けないからな。ゴミット」

「それはどうも、楽しみにしています。しかし黒い全身鎧ですか、
どの様な武器を使うのか見てみたいですね」

「お、気になるか、武器マニア…おい見ろ」

彼らが見つめる先には人だかりの中で口上を述べる綺麗な顔立ち
の青年と、極めて珍しい黒い竜。灰色の荷車、そして今までに噂し
ていた黒い鎧の戦士だった。

銀色の精霊、商売する 前（後書き）

終わりない。続きます

銀色の精靈、商売する 後（前書き）

長くなつちやつた・・・

黒い小鳥を肩に乗せ、人々の中心で黒髪の青年は両手を広げて朗らかに語る。

「さあみなさん、見ていてくださいーー世にも珍しい黒竜と、その使い手の“くろの騎士”ですよー！」

言い終わると青年はお辞儀をして微笑む。彼らを取り囲む人々は黒い竜と黒い鎧をもの珍しげに眺めるが、何人かの女性は熱心に青年を見つめていた。

「これからすぐこのものをお見せしますよー！ とくとく覗あれー！」

さあどうぞー！ と言わんばかりに紹介され、黒い鎧の戦士と黒い竜はしばし見つめ合ひ。

(「大道芸をすればいいと言つたのは俺だが…さて、何をすれば良いか。お前何かありかゲオルギ？」)
(「ギュー…」)

両者が戸惑つていると、青年の肩に止まっていた黒い小鳥が間に飛び込んで来て地上に降り、立ち右の翼を振つた。

その動きを見て黒い鎧が右腕を無造作に上げると、それを合図にしたかのように黒い竜が地面に伏せた。

小鳥がさらに一声鳴くと、今度は右手を前へ差し出し、そこに竜が鋭い爪の並んだ前足を片方乗せた。

「…」

乗せた方も乗せられた方もこの行動にびっくりしたらしいのかわ

からずにいたが、周囲はどよめいた。

「「おおおー！」」

「り、竜が芸をしたぞー！」

「続きまして。さあ」

青年の掛け声に慌て、黒い鎧がとりあえずもう片方の手を差し出され、竜は反対の前足も乗せ、それから回転して太くて力強い尻尾を乗せ、最後になんでも噛み砕きそうな顎を乗せた。

観客達はさらに驚き、やつた方も驚いていた。

（「じうじつしたことだけでも驚かれるものなんだな」）

（「この地方では竜の生息数はかなり少ないので、珍しいのでしよう」）

幼い頃から竜と共に育ち、常に一緒にいると言つても過言ではない黒い鎧は、世間と感覚がずれていて、一般的によく訓練された竜でも簡単に芸などしないのだと知らなかつた。

（あそこで大空らしき騎士達が興奮しているんだが…）この騎士団にも騎竜はいるだろ（うに）

「すげえ！ 賢い奴だなアイツ！」

「あんなに簡単な命令でちゃんと動く竜は初めて見たぞ」

「黒い竜か、初めて見たが大人しいんだな」

観客の中に見知った制服を見かけて、黒の鎧はさらに混乱した。

「さて続きましては」

そう言つと黒髪の青年は荷車からいくつかの果物を盛つた籠を取り出し、離れた位置から竜に向かつて林檎を放り投げた。

黒い竜は口で受け止め、満足そうに噛み砕いて飲み込んだ。続いて様々な方向へ果物が放り投げられるが、素早く追いかけ、ひとつも落とさずぱくりぱくりと食べていく。

人々はまた拍手をした。

「お客様の中にナイフを持っている方はいませんか?」

「小型の投げナイフならありますよ」

青年が尋ねると、観客の中にいた騎士が答えた。

「ありがとうございます。お借りしますね」

差し出されたそれを受け取ると、青年は鞘から抜いて手のひらを超える長さほどの刀を手に取りざつと確認すると、黒い鎧に渡して距離をとる。

「いきますよ。それ」

そしてオレンジを投げた。

ナイフで模擬戦でもするのかと思っていた黒い鎧は慌てて腕を動かした。その腕が思つていった以上に素早くかつ自由に動かせたのに驚きつつ、彼は空中でオレンジを六等分した。

青年がすかさず両手を差し出し、いつの間にか持っていた皿で受け止める。

「今度はこちらを」

次々に投げられた果物を黒い鎧は難なく切り分けていき、青年が持つ皿には果物が山盛りになつた。

最後に大きめの瓜を黒い鎧が輪切りにして、ナイフは騎士に返された。

「これで我々の出し物は終了です。最後までみて頂いたみなさん、ありがとうございました」

その言葉と共に青年は深くお辞儀をし、一歩遅れて黒い鎧も礼をした。その横で黒い竜が小箱を青年の足元に置いた。

「楽しんでいただけましたら、こちらにお気持ちをお願いします」
彼らを観ていた人々はこぞって小箱の中に金属製の貨幣を投げ入れる。予想以上の量に青年が内心驚いていると肩にとまつた黒い小鳥が青年の髪を引っ張る。

「そうでした。皆さん、こちらは“無料”ですので、どうぞ! 今日は見て下さりありがとうございました!」

観客に礼を言いながら青年は黒い鎧が切り分けた果物を配る。

「面白い奴らがいるな。あの竜、うちに買えないかな」

「どうしたコミット、ひどく真剣な顔つきで」

「さっき貸したナイフ、実は刃こぼれしていたから修理にだそっとしていただやつなんです」

「あ？ だがあの黒い鎧は普通に使つてたろ」

「見てください。刃がこんなに鋭くなっています。すっかり別物ですよ。法術でもこういったことは一瞬でできるものではない」

「あの司会の男もただ者じやなかつたつてことか。どこから来た奴らなんだろうか」

「“くろの騎士”か。闘えるのが楽しみですね」

後日、彼らが大空騎士団の上司に大会で圧倒的な強さを見せた正体不明の“くろの騎士”についての報告を求められた際、「通りで竜と一緒に大道芸をしていました」と報告し、上司達の混乱を深めた。

「そろそろ本予選の時間だ。レーヘン、俺は闘技場へ行く

「わかりました。落ち合つ場所は昨日と同じ場所で」

「わかった」

そう言葉を交わし、黒い鎧は青年と竜を残し闘技場へ向かつた。

「兄ちゃんよ、この林檎どこ産なんだい。えらく味がいいな
引き続き御礼の言葉と共に人々に果物を配つていた青年に話しかける男がいた。

「ここからずっと海のほうの小さな国のです。えーと、本当はこれを売りに来たのですが出店を出す余裕がなくて」

肩にとまつた黒い小鳥に髪を引っ張られながら、青年は答えた。

「うちのはこの街で青果店を出してるんだが、量があるんならうつと見せてくれないかい」

「いいですよ。乾燥させたものもあります。どれも甘くて美味しいんですよ」

「そうかい。おお、こりや質のいいもんばかりだな。実は商品の仕入れが騎士さんたちの大会に間に合わなくなつてな。よかつたらうつで売らないか」

「それはありがたい」とです。ぜひお願ひします」

青年は微笑んだ。

「それで、どうしてこうなつたのでしょうか？」

青年は首をかしげた。

「あんた商売しにきたんだろ、顔もいいし、うちの出店手伝つてくれよ。ちゃんと買い取つた果物の代金と別に賃金も払うからよ。な！」

男に笑顔で肩をたたかれ、台車に繫がれた竜を見る。黒い竜は口を大きく開かないよう革製のベルトが取り付けられている。

「窮屈じやないかい？…コスプレ？ 隨分と変わつた言葉を知つているね。まあ君がいいのなら」

竜の頭に止まつていた黒い小鳥がピチピチと鳴く。

「大丈夫ですよ。ゲオルギも手伝つてくれますし、さすがに五百年はかかりませんで」

「準備いいかい？ 台車が倒れないよう気をつけてついてきてくれ」
青果店の男に案内されて広場へ着くと、そこは人でごつた返していた。色とりどりの布を張つた屋台や出店が並び、様々な物を売つてゐる。

「お、兄ちゃん。なんだそいつら」

「おう、やつてるか。今日は稼ぎ時だからな、大道芸の兄さんを助つ人で呼んできた」

「よろしくおねがいします」

「おお、べっぴんの兄ちゃん、よろしく頼むわ。げ、そこにいるの竜じやねえか！」

「大人しいですよ。頭が良いので人間を襲つたりしませんよ」

果物を売る出店のところで男によく似た別の男が出迎えた。簡単に挨拶をして、仕事について教わる。

「箱に入ったものは種類ごとに値段が書いてあるから一つずつその値段で売つてくれ。まとまつて売るものは袋やカゴに書いてある。あとはそこの壁に値段表吊るしてあるからよ」

「はい」

「あとは果物を包むのはこれな」

「はい（包む…持つて帰るために包装するのですね）」

「代金計算用の計算尺は値段表の横に置いてあるから自由に使ってくれ」

「はい（けいさんじやくつてなんでしょう…ああそいつたものなのですか）」

「…まあ、あんた、わからないことがあつたら肩の鳥じやなくて俺に聞いてくれよ。それなんかの芸か？」

「ああ、すみません。ついつい癖になつていまして」

「…いいけどよ。午後から来るはずだった手伝いが来れないんで、正直助かるわ。しつかり売つてくれよ」

「はい」

青年は頑張った。釣り計算も商品の包装もはじめはまじついたがしつかりとこなし、始終爽やかな笑顔で道行く人に「おいしい果物はいかがですか」と声をかけ、人足が途絶えると黒い竜と一緒にまた大道芸をして人目を集めた。

果物を買った客の中にはずっと話しかけてくる者がいたり、竜を売つてくれなどと言つてくる者もいたが、そのたびに黒い小鳥が助言をしてなんとか言い抜けた。

青年は少々驚いていた。かつて人の街をさまよいながら五百年か

けて人探しをしていった自分が、これほどまで人々としつかりとしたやりとりが出来るとは考えもしなかった。だが、主に助言をもらい、仲間に助けられることで、ここまでしつかり任務をこなせている。（「これはベウォルクトへの良い土産話になりそうです！」）

「あら美味しそう」

かけられた声に顔をあげれば、銀縁の眼鏡をかけた女性が立ち止まってドライフルーツの包みを見ていた。隣にいる紫色の髪の男性がすかさず懐から財布を出す。

「その棚にあるものを全てください」

「はい」

青年は手早く全てを包み、代金を受け取って男に渡した。

「コリア」

男性は瞳をきらめかせ、受け取った包を女性へ手渡す。

「ありがとうございます。夜食によさそうですね。これだけあれば待機室の差し入れにちょうどいいです。あとで代金半分払いますね」「これはコリアにと…。いや代金はいらない」

女性は礼を言うが、男の望むものではなかつたらしい。残念そうな表情をしているが女性は気づかず竜に意識を向けていた。

「珍しい。黒くて可愛い竜ですね」

「ありがとうございます」

「この子は何を食べますか？」

「果物が多いですかね。よかつたりどうぞ」

青年が渡したオレンジを受け取り、女性は竜に差し出す。竜は器用にオレンジをくわえて、美味しそうに食べる。

「このオレンジ、五つほどくださいな」

「はい。ありがとうございます」

女性は購入したオレンジを紫の髪の男性に渡す。

「美味しいそうで買ってみました。エシル。どうぞ」

男性はそつと両手で受け取り、微笑んだ。

「ああ、ありがとう。あとで一緒に待機室で食べよう」

男女が店を立ち去った後、青年の肩にとまつた小鳥がため息を付いた。

「お疲れですか？ 身体に不調が出たら接続を切って休んでくださいね」

元気だといった風に、だが力なく首を振る小鳥を青年は見つめるしかなかつた。

「今日はありがとうございます。助かっただわ。これ兄貴から預かっただ果物買取り代金と、今日の手間賃な」

夜になり、出店の片付けまでをすべて終えるまで手伝い、青年は代金を受け取つた。

「ありがとうございます。これで喜んでもらえます」

「お、良い顔しやがるな。故郷に大事な人でもいるのか」「ええ。とても大切な方です。あまり出歩けない方なので、いつも叶えられるだけ望みを叶えてあげたいんです」

青年は微笑む。日中の微笑みとはまるで違つ、深さと柔らかみのあるものだった。

「じゃあ土産でも買ってくといい。大会期間中はいろんなもんが売つてるからよ」

「はい」

肩にとまつたまま眠る小鳥をやさしく撫でながら、青年は言った。

レーベンボーグの話 前（本編関係なし）（前書き）

2011年4月1日の活動報告に書いてたもしもネタを書いてみました。

本編ほとんど関係ないです。

レー・ベンボーフの話 前（本編関係なし）

深夜に当たる時間、レー・ヘンが城の中を歩いていると突然空間のねじれを感じした。

精霊が作れるレベルの何とかなりそうな程度のものだったので、ベウォルクトに状況を説明して、そのまま巻き込まれてみることにした。

「どなたかがワタシに用があるみたいですね」

一瞬全身にノイズが走る感覚があり、瞬きをすると以前と変わらず城内だった。

「？」

城のシステムを触つてみてもそう違いを感じなかつたが、ところどころ知らない構造を感知した。興味はあつたが、ひとまず人や精霊の気配が集まっている感覚がある王の間へ向かうことにする。

「レー・ヘン！」

王の間に行くと、ファム女王が駆け寄ってきた。近づくと、いきなり胸のあたりをたたいてくる。

「ない！ アナタはレー・ヘンだわー！」

「？ ビラしたんですかファムさま」

「よつじや、平行世界のワタシ」

少し高く響く声がして、見ると“外見は違うのに個体として自分と同一の存在”がいた。

「アナタはどなたですか？」

警戒して女王を背後にかばうよつとして立つと、相手はくすりと

笑う。

「いきなり呼び出して申し訳ない。女王とワタシよ
「ということは、この方はワタシの次元のファームさまですか」
自分だけならまだしも、女王も勝手に連れてきたことに不快感を
覚え、レーへンは眉間に皺をつくり相手を睨む。

「気がついたらこきなり目の前に女性版レーへンがいたのよ。どう
いうことなの」

「…女？」

女王の言葉に、見れば相手の外見は自分とは少し違っていた。

銀髪は一緒だがあちらのほうがやや長く、サイドを細かい三つ編
みにしてまとめている。服装も、肩周りをふくらませた濃い灰色の
ワンピースに、上から光沢の無い白っぽいものを巻きつけており、
ワンピースの下には黒のストッキングと、くねぶし丈までのヒール
の高い編み上げブーツを履いている。

よく観察すれば体型も違うようだった。身長はあちらのほうがや
や低く、その分の質量が胸囲と足腰についている。

レーへンは2、3度瞬きをした。

自分と同じ個体情報を持つ相手は、人間の女性の姿をしていた。
レーへンが相手を認識したのと同時に、相手はこの状況を楽しむ
かのように笑みを浮かべた。

「アナタ、レーへんじゃないし、お城もなんかちょっと違つて。こ
こはどうよ」

不安のかレーへンの背にすがりつても女王は気丈に田の前の“
別のレーへン”に問い合わせる。

「ワタシの名はレーへンボーフ」

そう告げると、レーへンボーフは上体をかがめて礼をした。

「…私は、貴方方がいたのとは違う、別次元のくろやみ国です」

* * *

「実はお願ひがあり、ワタシがお呼びしました」
レーべンボーフは王の間にテーブルと椅子を出し、どこからとも
なく取り出したティーセットでお茶を淹れはじめた。
きつちりと時間を測つて茶葉を蒸し、金属製のポットからガラス
製のティーカップへ注ぐと音も立てずソーサー」とそつと女王の前
に置く。

「どうぞ」

「あ、ありがとうございます」

口をつけると女王は目を見開いた。

「おいしい…」

レーべンボーフはその言葉を聞いて微笑み、茶請けとしてクリー
ムを挟んだビスケットを花柄のトレイに乗せて差し出すと再び口を開いた。

「貴方たちの次元と、この次元は数ある平行世界のなかでもかなり
近しいものなのです」

「平行世界？」

「この世の動きにゆらぎをもたらすための、ささやかな分岐から生
まれる“もしも”の世界です。本来ならそれぞれが互いの存在に気
づくことはありませんし、こうして接触することもありません」

「ですが、この次元のワタシは精霊の力で干渉してこの場を設けて
いるようですね」

女王の問いに、レーべンボーフが答え、レーへンが続ける。

「理屈はわからないけれど、目の前の事実からどうこうものなの
はなんとなくわかったわ」

眉間に皺をよせつつも、女王は目の前の銀髪の精霊を見比べ、頷
きながら言った。

「理解が早い主さまです」

レー・ベンボーフの笑みが深まつた。

「それで、私たちに何の用なの？ 正直、出来ることなんてあんまりないと思つけど」

女王がビスケットを口に運びながら首を傾げる。

「実は相談に乗っていただきたいのです。ワタシと、ワタシの主フ

ィムさまのことで」

「フィム？ ファムじゃなくて？」

「ええ。この次元での我が主はフィムさま。15歳の男子です」

思わずレー・ヘンはファムを見た。

この人が男性？

視線を受けてファムもレー・ヘンを見返す。自分を指さしながら

「私が男？ しかも年下？」

「ええ。貴方たちの次元ではくろやみ国の王は女性ですが、ここでは逆なのです」

レー・ベンボーフがゆっくりと頷いた。

「じ、じゅうじゅうさいつて…」

女王は何故かそこに驚いているようだ。

「ボーフ！！」

王の間に慌ただしい足音が近づき、扉を蹴り開ける者がいた。

「また訓練中にベウオが襲つてきたんだけど… なんとかしてよ…」

入ってきたのは黒い瞳の少年だった。黒髪をレー・ヘンほどの長さで整え、灰色と黒の丈夫そうな服をきている。

「襲つているのではありません。これはじゅれついているのです」

高く透き通る声を聞いて、レー・ヘンは少年が抱えている存在に気づいた。

灰色の布を目と額にまいた、小柄な少女。人間に換算すれば4~6歳あたりの体格。服装は灰色の生地を多く使つた足元まで裾があるので、布に覆われていない箇所から見える肌は石のように白く、

髪は背中までの真つ直ぐな白っぽい銀髪でだった。幅の広い袖の先から猛禽類を思わせる銀色の鋭い爪が覗いている。

「まさか…ベウォルクト？」

数百年以上年上の、落ち着いた先輩精霊のまさかの子供姿は自分の女姿を確認した時以上の衝撃だつた。

「ここにちは、別次元のレーべンボーフ」

「ん？ あんたらどなた？ ボーフ、お密さん？」

少年は近づくと真つ直ぐこちらを見上げてきた。

「ええ。ワタシが呼んだ別次元のワタシ達ですよ。フィムさま」
レーべンボーフの言葉に、少年は目を丸くする。その表情は女王によく似ていた。

「なにそれ！ ジャあこの格好良い兄さんはレーべンボーフなの！？」

すじい、すじいと、フィムさまはしゃぎながらレーべンを見上げる。フィムに抱えられた少女版ベウォルクトも一緒に見上げてくるので、レーべンは落ち着かない気分になつてきた。

「じゃあ、こっちの人は俺なの？」

「どーもここにちは、『私』」

女王が腕組みしながら微笑む。

「ふーん、よろしく『俺』」

別次元の主は年上の女性である自分にどう接すればいいのかわからぬいらしく、首をかしげながら挨拶する。

「ボーフさんに言われてマフィンを持つてきました」

フィムの背後から銀髪の同じ顔した少年が現れる。

「ありがとうござります。ハース」

こちらにも影霊は存在するらしい。

「まあ、客人も交えておやつにしましょ」

レーエンボーフはそう告げると新たに茶を淹れ始めた。

フィムとハースはテーブルにつき、ベウォルクトは退屈だとつぶやいて王の間を出て行つた。体重についてぶつぶついながらも女王は新しく出て来た菓子にも手を伸ばす。

「このマフィンすっごくおいしい。誰が焼いたの？」

「ワタシですが」

「ボーフはどんな料理でも作れるし、すっごく美味しいんだよね」

レーへンは自慢げなフィムの言葉に嫌な予感を覚えた。

女王が毅然とした顔つきでこちらを見る。

「ずるい！ レーへん、やっぱり料理覚えなさい！」

「えええ～」

レーベンボーフの話 前（本編関係なし）（後書き）

続きます。

“せいいれいのちから”って便利

レー・ベンボーフの話 中（本編関係なし）

「へえ、じつにもサヴァはいるのね」

「サヴァは女騎士ですごく強いんだ。時々稽古付けてもらってる」「サヴァの騎竜のゲイラ、あとは弟のレネとシオンつていう女の子がいます。今はみんな闘技場の方にでかけてるんで不在ですが」

フィムがマフィンにかじりつく横で、ハースが行儀よく籠からマフィンを自分の皿に取りながら言つた。

「ああその時期なのね、今」

ひとくちマフィンを食べると、女王は少年王を見た。

「じゃあ今あれの準備ですごく忙しいんじゃない？」

「あれ？」

「今度海の上であるじゃない。私なんて毎日頭爆発しそうよ」

女王は最近王の間で資料に向かって文句を言いながら頭をかかえていることがある。あれはそういう意味があつたのだ。いつ女王の頭蓋が爆発してもいいよう、今度その光景を見たら医療器材を持つて待機していようとレー・ベンは決意した。

「フィムさまは諸国合同で行われる会合に不参加を表明しました」

レー・ベンボーフがお茶のおかわりを用意しながら言つた。

「え、そうなの？ どうして？ みんなに色々言われなかつたの？」

不思議そうな顔をして女王は尋ねる。彼女は初めは会合に参加するのに難色を示していたが、国民と精靈に説得され今は前向きに準

備をすすめている。

「それは・・・」

「いいんだ！ 僕はここでゆっくり過ごしていいんだから！」

言葉を続けようとするレーベンボーフを遮る形でそう言つと、用事があるからとフィムは王の間を出て行つた。

「相談事とは、もしかして彼のことですか？」

レーへンがフィムが去つていつた扉を眺めながら言つ。女王はあんな風に会話を止めて逃走するようなことはしない。

「ええ」

レーベンボーフは寂しそうに言つ。

「フィムさまには立派な帝王になつていただきたいのです。ご本人も当初はそう望まれていました。ですが、最近のフィムさまあまりものことに積極的でなはくなり、ワタシやベウォルクトとも『信頼関係』というものがうまく築けていないうなりなのです」

「信頼関係ね・・・」

「数ある並行次元の中で、『国主と精霊』として一番関係が良好な貴方がたに教えを乞いたいのです」

そう言われ、レーへンは誇らしい気分になつた。女王には時々叱られるが、嫌われたり、無視されたり、遠慮されたことは一度もないのだ。

「私とレーへンは別に関係ないと思うわ」

女王はカップのお茶を飲み干しながらあつさりと言つたので、レーへんはちょっとショックを覚える。

「この国の一日の流れ、詳しく教えてくれない？」

レーベンボーフは不思議そうな顔をしながら、ハースと共にこの世界のくろやみ国の一について説明した。ひととおり聞き終わると、女王は何かを納得していた。

「ここでは家事とかみんなあなた達がやつてるから、人間が暇なの

ね。だから信頼関係も築けていないんだわ。」」飯の時間もみんなバラバラだなんて、こんな広いお城の中じゃ一皿顔を合わさない事にもなっちゃうじゃないの。うちでも朝と晩は一緒に食べるようにしているわよ

「フィムは孤独になつていてるのだと、女王は言つ。精靈だけではなく周りの国民たちとも交流が足りていないので

「精靈でも人間でもいいから、とにかくみんなでやる仕事を増やすの。お城の設備チェックとか、身の回りの掃除とかそういうの。一緒に作業すれば何か喋るだろうし、交流も深まるわ

「言われてみればレー・ヘンの次元の女王と国民たちは身の回りのことはなるべく自分たちでこなしていた。城のシステムも使うが頼り切らず（使い方がよく分からぬかららしい）、精靈にすべて任せず（あてに出来ないと言われた）、特に食べる」とに関しては（精靈達が何もしないので）女王を中心に熱心に動いており、果樹園での収穫や材料の加工にも手間と時間をかけ、毎日違う料理を作つている。

「レーベンボーフと比べるとレー・ヘンは何もしていなによつに思えていたが、これはこれでいいらしい。

「ワタシとフィムさまの関係はどうなのでしょうか

「アナタの外見が年上の女性だからあまり強く出られないんじやない？ きっとあの子、アナタの事大目にしたいのよ

「うまく育てれば将来きっといい男になると、女王はなにやら頷いている。

「どうすればぎこちなさが減るのでしよう

「うーん、会話が増えればいいと思うけど。美味しい料理作つてあげるとか？ でも毎日だと嬉しさも減るかもしねいわね

「あの、女として喜ばせて差し上げるのはまずいのでしょうか」

「レーベンボーフの言葉に女王の顔がひきつった。

「まさか… 寝室に忍びこむとかやってないでしようね？」

女性姿の精霊は顔をしかめる。やつたらしく。

「ずいぶんと大胆な精霊ねえ」

「それ以来距離を置かれるようになりました」

「警戒されているのよ。あの子も白箔国出身なら、私と価値観も近いはずよ。いい？ 親しき仲にもちゃんと礼儀つて必要なのよ？」

「そう言ひと女王は立ち上がり指を一本立てる。

「ちなみにうちでは、精霊であろうと幼馴染みであろうと夜に女子の部屋へ家族以外の異性が尋ねてはいけない決まりになつてゐるの」

続けてもう一本指を立てる。

「それと、共同で使う大浴場の利用時間もちゃんと別。着替えを見るのも厳禁！ ひちのレーくんはそのあたりしっかり守らせているわ」

「何度も叱られましたから」

一度入浴中に足を滑らせた女王を助けようとして侵入し、その後数時間にわたり王の間で正座させられたこともある。

「躾は大事よ」

そこで何かを思いついたらしく、女王は笑顔になりレーべンボーフを見る。

「フィムがまだ国を取りまとめられないなら、アナタがやればいいわ」

「ワタシですか」

「主をアナタが鍛えればいいんじゃない？ セツチ方面で躾の上手い人がうちの国にいるんだけど、ちょっと呼び出せる？」

「え、ええ」

レーへンはあんまり良くない予感がしたが、自分と同じ存在が押し黙ってしまう状況が珍しいので、黙つて觀察することにした。

レーべンボーフの話 後（本編関係なし）

女王の説明を聞いた後、王の間を出でていったレーべンボーフは数分経たずに一人の女性を連れて戻つて来た。

「なんだ？」

前髪だけは長いが短く整えられた銀髪、黒の細身のパンツに光沢のある淡い灰色のワイシャツ。そして高いヒールのショートブーツを履いた女性、元血霧の女帝ことマルハレータがそこに立っていた。

「旅の途中呼び出してごめんなさい。身体は大丈夫？ 実はね……」

「ふうん。別次元ね」

マルハレータはどこか眠そうな顔で女王の説明を聞き、たいして興味なさそうに頷いた。

「まあ、大体事情はわかった。ところで、こっちにはおれみたいなのもいるのか？」

「ええ」

王の間に現れたのは細身の男性だった。マルハレータの男性版と言つて良い。長い銀髪を背後で束ね、黒い上下を来て首にゆるく赤いリボンタイをしめている。男性の隣には小柄な少女が寄り添つていた。

男となくやら言葉を交わしていたマルハレータはいきなり相手にキレだした。

「おれに似た顔でんな情けないこと言つてんじゃねえ。クソつまんねえ男だな！」

「貴様こそ、可愛げのない女だ！」

「はつ、てめーに振舞う愛想なんぞない持ち合わせちゃいないからな」

額をぶつけ合つかのように睨み合い、熾烈なガンの飛ばしあいが始まる。

「あれ、同属嫌悪つていうんじゃないかしら」

手は出でていないが口喧嘩を始めた二人を遠くから眺めながら、女王があいに手をあてて言つた。

「どっちもどっちってことですね」

レーへンは女王の隣で言つた。

そのうち言い合いは規模が大きくなり、ついにマルハレータの我慢が切れて蹴りが出た。いきなりの蹴りによろめく男にさらに蹴りを入れようとした近づくマルハレータに立ちはだかる者がいた。

「レーモントさまをいじめないで！」

男に寄り添つていた少女だった。同じように銀髪だが一本の三つ編みにまとめられており、暗い銀色の瞳をしている。レース飾りのついた黒いワンピースを着て、同じく黒色の光沢のある丸みをおびたブーツを履いており、背中には身体に不釣合いな大きさの合皮の縦に長いケースを背負つていた。

いきなり飛び出してきた少女の姿に目を丸くし、マルハレータは足を引いた。

「ローズ、やめる」

レーモントという名前らしい男性版マルハレータが焦りながら少女をどけようとするが、少女は頑として動かない。その様子を見て、マルハレータは目を細める。

「こちのあいつか…別人だな」

「お前のところにもいるのか。どんなのなんだ」

レーモントに問われ、マルハレータは前髪をかきあげながら言つ。
「あー、男だ。目付きが悪くて、バカで、お前より団体がでかい」
「や、そうか。この子が…大男…」

己の腰のあたりにしがみつく少女を見下ろし、レーモントは顔をひきつらせる。

マルハレータは近づくと屈みこみ、少女と団線を合わせた。

「なあ、お前、この男のこと好きか？」

「はい、大好きです！」

花もほころぶような可憐な笑顔だった。レーモントはその言語に優しく笑みを浮かべ、少女の髪を撫でた。その光景を見て、マルハレータはしかめ面をした。彼女は続けて問いかける。

「そうか。ローズといつたか。お前自分の命で男の命が助かると言われたらどうする?」

「私の命を差し出します」

少女は迷いなく言った。

「この男はやめると言つても?」

「レーモントさまが死んじやうなんて絶対に駄目です。レーモントさまがいない世界なんて世界じゃないです」

「そうか」

まっすぐな視線を受け止め、何かを納得したらしくマルハレータはひとつ頷くとこちらへ戻ってきた。

「平行世界だな」

「あれでわかるのね」

「ああ」

* * *

目を開けると、いつもの私のお城のだった。

女性版のレー・ベンとが、男の子の私とかが出てくるかなり変わった夢をみた。本当に夢だったのかなんだつたのか分からなければ、思つところがあつてレー・ベンにお茶を淹れせたら、すゞい味になつて出でてきた。

「あつらのワタシと同じようにしたのに。どうしてでしょつか」
そう言つて銀髪の精靈が納得いかない風に首をかしげていたので、
あれはどいつも夢ではないみたい。

あつちの私、すこしへいい男になるといいわね。

* * *

「女の俺は帰つたの？」

「ええ。先ほど。貴方によろしくとおつしゃつていました」

「そつか」

「フィムさま、今でもヴィルヘルミナ嬢に会いたいですか？」

「会いたい…けど…俺、もうここから出られないんだろ？」

フィムは暗い表情で言つ。この子のこんな表情が増えたのはいつ頃からだろうか

「何故諦めるのです？ 探せば手段などいくらでも見つかるでしょ

う

現に、女性のあなたは諦めていませんでしたよ

あえてそう言葉にはせず、レー・ベン・ボーフは田の前の少年を見下ろす。

「でも…あいつ貴族だし…」

「早く強い王になつてヴィルヘルミナを迎えて行くと意氣込んだのを、もうお忘れで？」

「あれは、その」

尻窓みになつて消えた言葉にレー・ベン・ボーフの片眉がぴくりと動

いた。

「客人が言つていたのですが」

銀髪の精靈はうつむき、前髪に表情が隠れる。

「煮え切らない男ほど情けないものはないそうですよ。強くなりたいのでは無いですか？」

「な、なりたいさ！ そりやあ」

その言葉を聞き、レーベンボーフは微笑んだ。そしておもむろに指先を伸ばすと変形させ、ロープのようにしなるそれを勢い良く地面へ叩きつける。

空気を振動させるほどの衝撃音が響きわたった。

「そうですか、それではさらにも強くなるためにワタシも協力させていただきますね」

「な、なんだそれ」

「ムチです。調教用のもので、音は派手ですが痛みは弱いそうです。皮膚を一枚ほど弾け飛ばす程度ですから、声なんて出さないでくださいね」

ムチのしなり具合を確認しながらレーベンボーフはゆっくりとフィムへと向かつて歩き出す。かかとのヒールが床とがぶつかり、硬質な音が王の間に響き渡る。フィムは後ずさりうとしたが出来なかつた。なぜだか足が動かない。

「我が主人が一刻も早く世界に覇をとなえられるよう、ワタシが鍛え上げて差し上げましよう」

レーベンボーフは血のように真っ赤な薔薇が初めて花開いたかのよひに、鮮やかに微笑んだ。

* * *

「他の次元の私たちつて仲が悪いのかしら?」

「気になります?」

「ちょっとはね」

「おそらくワタシでも調べようと思えば出来ますが」「うーん… やらないでいいわ。私たちは私たちよ。それ以外の可能性なんか知つたってしようがないわ。アナタもそう考えてちょうどい」

「はい、ファムさま」

レー・ヘンは微笑んだ。主を世界の霸者にしたいと望む精靈が参考にするために我々を選んで呼び出したのだ。つまりこの次元の女王の未来はそれに近いということなのだろう。

「大丈夫です。ファムさまにはワタシがついています」
につこり笑う銀髪の青年姿の精靈を見て、「いまいち安心できないけれど、まあ頼りにしてるわ」女王はそつそつぶやいた。

レーベンポートの話 後（本編関係なし）（後書き）

あとがき：

おあそび企画の話なのでざっくりした内容です。おあそびなのでレーベンもファムさんも肩の力が抜けた感じになつてますね。レーベンボーフ姐さんはレーベンよりしっかりしているので、おつかいもしっかりこなして、うつかりもなさそうですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6237p/>

くろやみ国の番外編

2011年10月30日00時15分発行